

富士宮市文化財調査報告書第31集

浅間大社遺跡Ⅱ

2003

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第31集

浅間大社遺跡Ⅱ

2003

富士宮市教育委員会

例　　言

1. 本書は富士宮市宮町に所在する「浅間大社遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、富士宮市（消防本部・警防課）による消防団第3分団詰所建設工事事業に伴うものを浅間大社遺跡第3次発掘調査として実施し、富士山本宮浅間大社による祈祷殿（仮本殿）建設事業に伴うものを浅間大社遺跡第4次発掘調査として実施した。
3. 発掘調査を実施した場所は、第3次発掘調査が富士宮市宮町1403番地、第4次発掘調査が富士宮市宮町1402番地である。
4. 発掘調査は以下の体制で実施した。

〈第3次発掘調査〉

- 調査主体者 富士宮市教育委員会教育長 藤井國利
- 調査担当者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英誉
株式会社東日 文化財調査室室長 小金澤保雄
株式会社東日 文化財調査室調査員 武田英俊
株式会社東日 文化財調査室調査員 小谷亮二
- 調査補助員 阿部稔男、石川雅紹、大平美奈子、勝俣利雄、勝俣秀子、佐藤法夫、
佐野未芳、古郡善明、山崎美美子、依田佐太郎
- 整理作業員 佐藤節子、渡辺麻里

〈第4次発掘調査〉

- 調査主体者 富士宮市教育委員会教育長 藤井國利
- 調査担当者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英誉
富士宮市教育委員会文化課嘱託員 佐野恵里
富士宮市教育委員会文化課嘱託員 小野田晶
- 調査補助員 石川雅紹、大平美奈子、勝俣利雄、佐野未芳、古郡善明、山崎美美子、
依田佐太郎、渡辺 剛

5. 現地における発掘調査は、第3次発掘調査が平成14年10月2日から同年11月29日まで、第4次発掘調査が平成14年12月16日から平成15年1月31日まで実施した。
6. 写真撮影は、渡井英誉、武田英俊、佐野恵里が行なった。
7. 本書の執筆は、渡井、武田、佐野、小野田があたり、それぞれの文責を文末に示した。全体の総括および編集は渡井が担当した。
8. 本報告による出土品および記録図面、写真などは富士宮市教育委員会で保管している。
9. 発掘調査から報告書作成に至るまで次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）
池谷初恵、植松章八、遠藤ひかり、遠藤政貴、金子浩之、木ノ内義昭、建部恭宣、
松井一明、三浦祐子、渡井正二、富士山本宮浅間大社

凡　　例

1. 地形図、遺構実測図に記する高度は、全て海拔高度をもって示し、単位はメートル(m)とする。また、方位は真北を示す。
2. 土層説明で記す色調及び土器観察表における色調の觀察は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局)で補って判断している。
3. 遺構・遺物の縮尺についてはそれぞれにスケールを明示し、遺構・遺物の計測で()は推定値を表わす。なお、写真的縮尺は任意である。
4. 平安時代～中世の赤焼けの土器類については、原則的に「土師器」、「土師質土器」、「かわらけ」などの名称を総称して「カワラケ」を使用している。
5. 本書で用いる遺構の表示は以下のとおりとする。

SB …… 建物跡 SD …… 溝状遺構 SK …… 土坑

目　　次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 地理的環境と歴史的環境	3
3. 調査区の名称	7
第Ⅱ章 第3次発掘調査	8
1. 調査の経過	8
2. 層序	9
3. 遺構	13
4. 遺物	20
第Ⅲ章 第4次発掘調査	35
1. 調査の経過	35
2. 層序	35
3. 遺構	36
4. 遺物	42
第Ⅳ章 まとめ	46
1. 遺跡の動向	46
2. おわりに	48
報告書抄録	49

挿図目次

第1図 調査区全体図	2
第2図 遺跡周辺図	4
第3図 グリッド配置図	7
第4図 北区地形図	8
第5図 土層断面図①(北壁・東壁)	11
第6図 土層断面図②(南北・東西セクションベルト)	12
第7図 北区全体図	14
第8図 S B 1 実測図	15
第9図 S D 1 · S K 1 実測図	16
第10図 S K 実測図①	18
第11図 S K 実測図②	19
第12図 遺物集中区位置図	20
第13図 S B 1 遺物出土状況	22
第14図 遺物集中区① 遺物出土状況	23
第15図 遺物集中区② 遺物出土状況	23
第16図 出土銭貨	25
第17図 S B 1 出土遺物	26
第18図 SD 1 · SK · 遺物集中区出土遺物	27
第19図 包含層出土遺物①	28
第20図 包含層出土遺物②	29
第21図 包含層出土遺物③	30
第22図 包含層出土遺物④	31
第23図 層序	35
第24図 A区全体図	37
第25図 集石土坑全体図	38
第26図 集石土坑1層角柱材(凝灰岩)	39
第27図 B区全体図	40
第28図 S B 2 平面図	41
第29図 S B 2 · 包含層出土遺物⑤	44
第30図 包含層出土遺物⑥	45

挿表目次

第1表 周辺遺跡地名表	5
第2表 S K 計測表	17
第3表 遺物観察表①	32

第4表	遺物観察表②	33
第5表	遺物観察表③	34
第6表	B区ピット計測表	40
第7表	遺物観察表④	45

写真図版

- 図版1 浅間大社遺跡**
 a. 遺跡遠景（東より）／b. 調査区（第4次発掘調査）近景（南より）
- 図版2 第3次発掘調査**
 a. 調査区全景（東より）／b. 調査区全景（西より）
- 図版3 第3次発掘調査遺構①**
 a. SB1（南より）／b. SB1掘り方（南東より）／c. SB1遺物出土状況（北より）
- 図版4 第3次発掘調査遺構②**
 a. SD1（東より）／b. SD1遺物出土状況（南より）／c. SK2礫出土状況（西より）
 d. SK2完掘（西より）
- 図版5 第3次発掘調査遺構③**
 a. SK4完掘（南より）／b. SK5完掘（南より）／c. SK6完掘（南より）
 d. SK7完掘（北東より）／e. SK8完掘（東より）
- 図版6 第3次発掘調査遺構④**
 a. SK8遺物出土状況／b. SK9完掘（南より）／c. 遺物集中区①（東より）
- 図版7 第4次発掘調査遺構①**
 a. 調査区全景（南西より）／b. 集石土坑 1層（西より）
- 図版8 第4次発掘調査遺構②**
 a. 集石土坑 2層（南東より）／b. 集石土坑 3層（南東より）
- 図版9 第4次発掘調査遺構③**
 a. 集石土坑 4層（南東より）／b. B区 SB2（南西より）
- 図版10 第3次発掘調査 SB1・SD1・SK5・遺物集中区①・遺物包含層出土遺物**
 a. SB1出土遺物／b. SB1出土No.1／c. SD1出土No.25
 d. 出土カワラケNo.68・SK5出土No.34／e. 遺物集中区①出土カワラケNo.42・43
 f. No.43見込み／g. 出土カワラケ(1)
- 図版11 第3次発掘調査 遺物包含層出土遺物**
 a. 出土カワラケ(1)／b. 出土カワラケ(2)／c. 出土カワラケNo.110
 d. 出土陶器No.128／e. No.128高台／f. 出土青磁No.141
 g. 出土須恵器No.151
- 図版12 第3・4次発掘調査遺物**
 a. SB2出土カワラケ／b. 出土カワラケ(1)／c. 出土カワラケNo.169
 d. 出土土師器No.197／e. 出土錢貨

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査の経緯

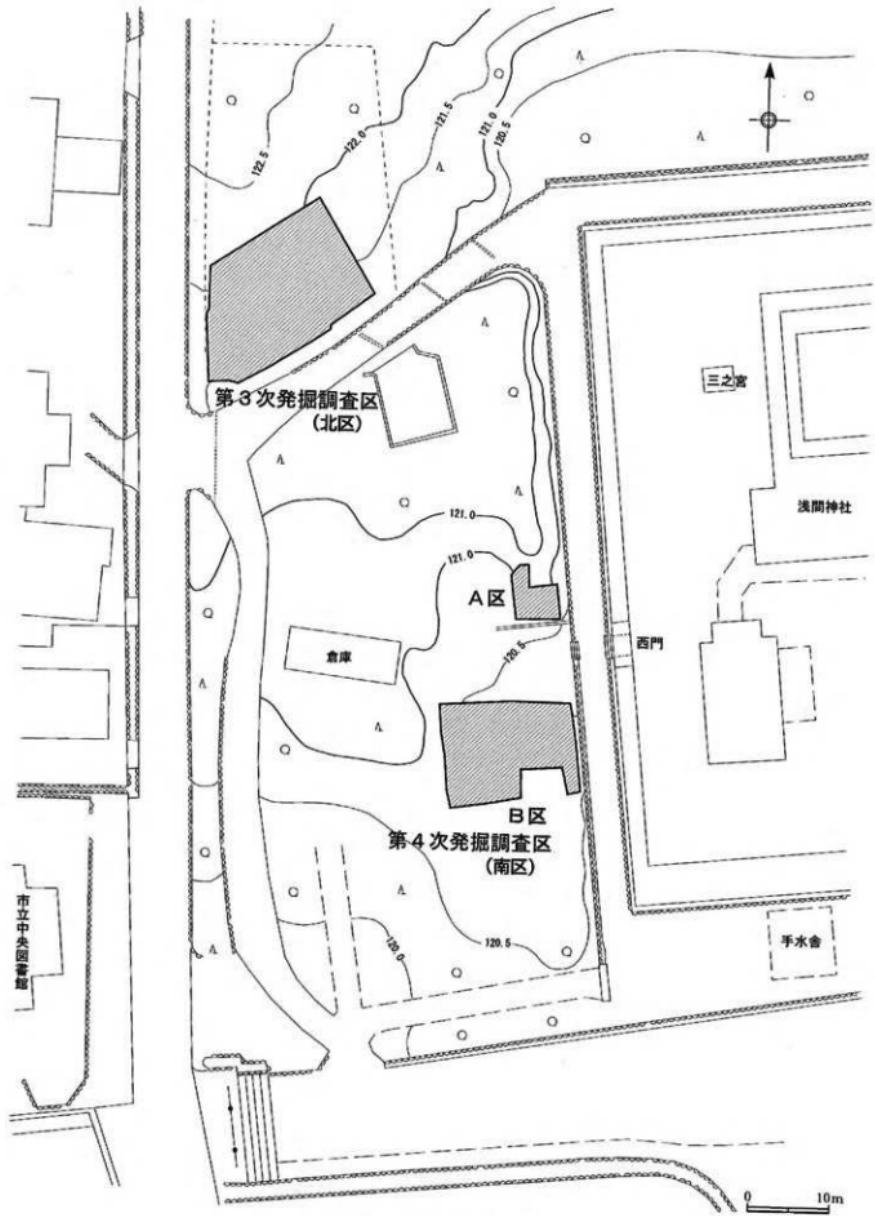
浅間大社は、2006年、現在地に神社が築かれて1200年を迎えるに当たり、本殿などの改修とともに周辺の整備を行なっている。特に神社の西側においては、浅間大社西門脇にある消防団詰所の神社北西側への移転や本殿・拝殿などの改修にともない建設される祈祷殿（仮本殿）の建設が廻廊西側で予定されるなど、一連の開発行為が集中することとなった。

浅間大社は、戦前より縄文時代以降の複合する遺跡として認識されており、現在では「浅間大社遺跡」として周知されている。そのため、富士宮市教育委員会では平成14年6月・10月に開発範囲に対する確認調査を実施して、遺跡の現況把握に努めた。その結果、いずれの地点でも中世を中心とした遺物の出土が認められることから本格的な発掘調査を実施することになった。調査は、開発事業の計画から富士宮市消防団第3分団（宮本区）詰所の建設にかかる発掘調査を浅間大社遺跡第3次発掘調査とし、祈祷殿建設のかかるそれを第4次発掘調査として実施することとした。開発事業者は第3次発掘調査が富士宮市であり、第4次発掘調査が浅間大社となる。また、教育委員会では、発掘調査に際して調査組織を急遽組むことが出来ない状況にあったため、第3次発掘調査については（株）東日文化財調査室の支援を受けてそれを実施している。

本報告では2回の発掘調査の成果について報告しているが、両地点は同じ微高地の上下に位置しており、よく似た状況を示すものであり相互に関連付けて考えなければならない。特に両地点から主体的に出土している平安時代から中世にかけての遺物類は浅間大社の歴史に直接かかわるものであり、極めて重要な発見であるといえるものである。

中世～近世にかけての考古学的な調査は、近年急速に調査件数が増え、年々大きな成果を上げている分野である。実際、富士宮市でも村山浅間神社遺跡や人穴のような中世から近世にかけて民間信仰として繁栄した富士山信仰にかかる遺跡の発掘調査が実施されたことや、この浅間大社遺跡で1994年と1995年に実行された第1次発掘調査と第2次発掘調査で江戸時代後半の富士講が最も栄える頃の陶磁器類が数多く発見されていることなどをその例として上げることができる。その中で、浅間大社では明治時代はじめの廢仏毀釈により、よく分からなくなってしまった神社の歴史を考える上で、江戸時代の隆盛をよく伝える資料が検出されたとして大きく評価できるものとなっている。ここ数年来、富士宮市でも中世から近世にかけての考古学的な資料に対する認識が評価され、発掘資料が徐々に蓄積されるようになっており、文献に記載されている内容との照合ができるようになりつつある。富士宮市は中世から普遍化する富士山信仰にかかる出来事が市の歴史を語る上で欠かせない事象として取り上げられ、それが現在の富士宮市を特徴付けているわけである。浅間大社遺跡での出土構造や出土遺物は、その多くがこの歴史事象にかかるものと考えができるのであるが、発掘調査では期待通りに中世の資料が多く発見されており、浅間大社の隆盛をよく伝えるものとなっている。それは神田川を挟んで隣接する大宮城跡の発掘調査で発見された資料とも相關するものであり、湧玉池～神田川の周辺に一大拠点が築かれている様子をよく表しているとも言えるのである。そして、この地区における政治と信仰の中核として発展した複雑な拠点施設の内容解説が必要となるのである。

（渡井）



第1図 調査区全体図

2. 地理的環境と歴史的環境

富士宮市は富士山西南麓に位置し、その傾斜面は火山噴出物や侵食によって形成された雑段状に連続する丘陵地帯と放射谷を形成している幾つかの小河川による扇状地が展開している。その扇端は富士山中腹より市内の中央を南流する潤井川に接しており、ちょうど富士山と対面する独立丘陵地域とを分断するように潤井川沖積地は形成されている。潤井川は弓沢川や風祭川など小河川を左岸に集合させて駿河湾に流れ出していることから、富士山南麓地域にある放射谷をまとめ本流といえる。そして、その支流のひとつ神田川の水源である湧玉池を含む地域に①浅間大社遺跡がある（第2図、第1表）。

遺跡の位置は、潤井川の左岸で富士山方向からの傾斜地と南側に広がる低湿地のちょうど接する場所に当たる。ちなみに現在の境内や馬場などの周辺は傾斜を整地して構築されたものである。また、扇状地と沖積地の堆積物の特性により、現在の浅間大社境内にある湧玉池のような湧水が発生し（富士宮市1988）、北側に神立山とよばれる山林の広がる丘陵を背負うかたちで、非常に豊かな環境を備えている。

遺跡の最古資料は、縄文時代早期後葉に遡る。湧玉池北側の台地（神立山か）で中野国雄氏が茅山式土器1片を採集している（富士宮市1971）。この時期の市内の遺跡は、周辺地域では、②黒田向林遺跡、③坊地上遺跡、④奥山地遺跡など丘陵部末端の湧水地の周辺で集落が運営されてきたということが見て取れる。浅間大社遺跡も対岸の異なる丘陵ではあるが、同様の背景を備えていることから、縄文時代早期より人類の活動があったことは十分に考えられる。

なお、遺跡は弥生・古墳時代の遺物の散布地でもあったようであり（静岡県1930）、古墳時代に関しては、近隣に⑤大宮城跡、⑥若の宮遺跡、⑦二ノ宮遺跡、⑧城山遺跡、⑨琴平遺跡、⑩貴船町遺跡、⑪東田遺跡、⑫連雀町遺跡と多くの散布地があり、大宮城跡に至っては、中・後期で21軒の堅穴住居跡が重複する集落が確認されている（富士宮市教育委員会2000）。同じく潤井川水系を媒介とする地域に位置し、5～7世紀にかけて継続する堅穴住居群と祭祀跡を有する拠点的集落である富士市の沢東遺跡との関係が注目される。

しかし、これ以降の8・9世紀において富士宮市全体の遺跡の様相としていえるが、集落の營みが認められなくなり、後述の大宮司館の祖型が築かれる12世紀前半まで、この地域は生活領域から離れたものと見受けられる。

現在の地に浅間大社が建立されたのは、大同元年（806）に勅命を受けた坂上田村麻呂が山宮（現山宮浅間神社）より遷座して社殿を造営したことがはじまりとされる。延暦14年（795）に駿河国富士郡大領の和邇部豊麿が大宮司に任命されて以来、明治に至るまで、富士氏が浅間大社の大宮司職を奉じてきた。

8世紀末から9世紀前半に語られる富士大宮司と浅間大社の当地へのかかわりであるが、富士氏が富士郡衙よりこの地域に移動してきたのは10世紀とみられている。元富士大宮司館跡（⑤大宮城跡）で出土した折戸53号窯式の灰釉陶器の年代からきているもので、9世紀後半から10世紀初頭にかけて、郡司制の衰退による富士郡衙の消滅に伴ったものであると考えられている（植松2000）。

富士大宮司館は、現在の浅間大社社殿より東へ約200mの富士山からの溶岩流により形成された比高差20mほどの急峻な傾斜地を背負った平坦地に築かれた（富士宮市教育委員会2000）。この館の性格は、瀬戸美濃産陶磁器などの数多くの日常什器が出土していることから、大宮司が生活を営む居館として日常的な政治も行なわれていたと考えられる。



0 200 1000m

第2図 遺跡周辺図

富士氏の当地域における政教に及ぶ支配が開始されて以降の時代は、この地域の空間的な変遷を辿ることができる。居館の変遷は12世紀前半から16世紀後半までに四段階に分けて考えられていて(馬飼野2000)、12世紀前半から13世紀前半は掘立柱建物を伴うだけで、周囲に防護的設備がなかった時代(I期)、13世紀後半に中規模の堀や土塁、区画溝が居館の周りに方形にめぐるようにした時代(II期)、16世紀中頃には中規模な堀が複数構えられ、城郭化がすすめられた時代(III期)、大規模な堀が築かれるが疎かな構えであった時代(IV期)に分けられる。

このなかで最も長いII期は、南北朝時代から室町時代にかけての富士氏の隆盛した時期にあたる。このころの富士氏すなわち浅間大社は流鏑馬の神事に象徴されるような武力を備え、南北両朝にとって見過ごすことのできない地方勢力となっていたようで、まず、後醍醐天皇が元弘3年(1333)とその翌年に浅間大社に対して、駿河国下島郷(現静岡市)の地頭職と富士郡上方庄(現富士宮市)を寄進して中興政府の基盤を確立しようとするが、建武2年(1335)に今度は中興政府に離反した直後の足利尊氏が浅間大社に遠江国石野弥六兵衛の所領を寄進し、次いで弟の直義も遠江国富士不入計(現袋井市)の土地を寄進するなど南北両朝間で浅間大社に対する社領の寄進が盛んに行なわれた。こうしたなかで浅間大社の大宮司である富士氏は駿河・遠江国の守護として入部した今川氏と結び付いて有力な在地勢力として成長を果した。居館もそれに相応しく変貌したのである。

III~IV期に居館は防護的機能を備えた城郭として姿を変えるようである。戦国時代であり、駿河と甲斐の国境地域に構える大宮城にとては必要に応じた変化といえる。永禄11年(1568)に今川・北条両氏との三国同盟を破棄して甲斐から進軍してきた武田信玄の攻撃を3度にわたり受けた富士氏の大宮城は武田側に投降するかたちとなり、敵勢の手に落ちた。IV期にみる大規模な堀は、武田氏の改修によるものとされる。

富士氏が今川・北条陣営から離れ武田氏につくと、武田氏は天正4年(1576)から浅間大社の社殿の造営をはじめ、社殿、楼門、幣殿、神殿などが完成したといわれるが、天正10年(1582)に武田氏が滅亡すると、社殿は焼き払われたと伝えられる。その後、織田信長や徳川家康の支配を受けるに従い、富士氏は武装解除を余儀なくされ、大宮司家として祭祀に専任するようになったとされる。

この戦禍のなかで大宮城は廃絶したと考えられ、その後富士氏は、現在の浅間大社境内の西側

第1表 周辺遺跡地名表

No.	遺跡名	時代	標高	種別	遺物・遺構
1	浅間大社遺跡	縄文(早)、古墳、古代、中世、近世	120	散布・城館	土器、石器、木製品、金属器、陶磁器、埴輪
2	黒田向林遺跡	縄文(早)	155	散布・集落	土器、石器、集石
3	坊地上遺跡	縄文(早・中)、弥生、古墳	135	散布	
4	奥山地遺跡	縄文(早・前)、古墳	133	散布	土器、石器
5	大宮城跡	古墳、奈良、平安、中世、近世	130	散布・集落・城館	土器、土製品、石製品、木製品、金属器、陶磁器
6	若の宮遺跡	古墳(前~後)、中世	140	散布	土器、陶磁器
7	二ノ宮遺跡	古墳(前~後)、奈良	142	散布	土器
8	城山遺跡	古墳(前~後)、中世	150	散布	土器、陶磁器
9	琴平遺跡	弥生、古墳	144	散布	土器
10	貢船町遺跡	弥生、古墳(前~後)、奈良	120	散布・集落	土器
11	東田遺跡	弥生、古墳	130	散布	土器
12	連雀町遺跡	弥生、古墳	130	散布	土器
13	芙蓉館跡		125		
14	第1・2次発掘調査区	中世、近世、近代	115		陶磁器、山茶碗、漆器、溝、井戸、石組、畦畔

へ約200mに併む⑬芙蓉館碑のある場所周辺へ移り住んだとなれば、明治維新期に富士亦八郎が駿州赤心隊を結成して東上するまで、大宮司館として続いたことになる。

大宮城が存在していたとされる当時の浅間大社の様子を表わすものに「絹本著色富士曼荼羅図」がある。室町～戦国時代の作とされる信仰絵図であるが、そのなかに浅間大社が描かれている。平屋の入母屋造りの本殿で、その脇の湧玉池で行者が水垢離をとっている様子がわかる。境内から神田川に架かる橋を渡った先には板葺きの屋根に石を置いた家や藁葺き屋根の家の家が数軒ある町並みがみられる。浅間大社の門前町はこの地域の商業の中心地で、永禄9年（1566）の今川氏の商業政策で六斎市（月に6回開かれる楽市）を許可したり、神田闇を撤廃するなどから商業や流通が活発であったと伝えられる。

現在の社殿の造りは、慶長9年（1604）に征夷大将軍となった徳川家康が造営したもので、本殿、拝殿、楼門、舞堂など壮大で華美なものであった。この造営のねらいは、天下統一事業のひとつであり、幕府の手厚い保護を受けるにあたり、浅間大社がこれまで掌握していた世俗的な権力を解体し、宗教的な面に専念させようとするものとされる（渡井正1996）。慶長11年に完成した社殿であるが、寛永年間と安政年間に起きた大地震で破壊したものもあり、当時の建物で現存するのは本殿、拝殿、楼門のみである。

富士氏の盛衰は、居館跡からの出土資料にも表れている。舶載陶磁器に代表される威信財といえる遺物の出土が顕著で、宋～明王朝時代の白磁や青磁、青白磁、黄釉鉄絵盤、天目茶碗など多種多様が出土している。国産陶器でも瀬戸美濃系を主体とした日常什器や花器類が出土している。また、饗宴に用いられるカワラケも大量に出土している。

舶載陶磁器の年代観で、その盛期とみられるのは13世紀中頃から14世紀前半で、中世大宮司家が有力な在地勢力へ成長していた時期を、これらの伝世品によってその由緒を物語らせている。また、日常什器類の出土量が最も多いのは15世紀中頃から後半で、その量が散漫になる16世紀代より戦国動乱の煽りを受け、16世紀後半をもって出土遺物の年代が途切れることから居館の廃絶年代と重ね合わせることができる。

浅間大社遺跡の⑭第1・2次発掘調査区では11～19世紀代の遺物が出土している（富士宮市教育委員会1996）。大宮城跡に後続する年代の遺物が主体で、南宋朝時代の青磁と明王朝時代の染付がみられるほかは、17世紀以降の瀬戸美濃系と肥前系陶磁器が大部分を占める。特に19世紀の陶磁器類の出土は富士講など近世の富士山信仰の隆盛を反映しているといえる。遺構は中世から近世にかけては神社城を区画する大型の溝とその外側に井戸が発見され、近代以降は大型堀を埋め立てて道を敷設したとみられる石組、水田跡や水路などが確認された。明治時代初頭に神社城に対する民衆の意識が変化したことが、この土地利用状況の変化によって理解できる。また、調査区域には「旧神職社僧屋敷址図」による「元社僧大蓮寺（亡所）」の跡地があったとされる（若林1996）。

近代を迎えての浅間大社は、神仏分離運動のなかで寺社の整備、社僧たちの俗人化など必然的な変貌を迫られる時代を経験したが、明治4年（1871）に国幣中社に、同29年（1896）には官幣大社に列せられた。第二次世界大戦終戦後、名称を富士山本宮浅間神社と変更し、さらに昭和57年（1982）「富士山本宮浅間大社」と変更して現在に至っている。そして浅間大社は全国的に分布する浅間神社の総本社としての偉大な景観を維持し、その門前町である富士宮市とともに歴史を歩んでいるといえる。

（小野田）

3. 調査区の名称

発掘調査は第3次発掘調査区を北区、第4次発掘調査区を南区とし、北区約330m²、南区約185m²、合計約515m²を調査した。

調査方法は、北区と南区を通過する南北のラインを基準に、5×5mのグリッドを設定し（第3図）、南から北はアルファベットを、西から東は算用数字を用いて、そのグリッド内の南西方向にある交点をグリッド名とした。

遺物は、グリッドごとに一括して採集した。

（佐野）

〈文献〉

植松 章八 2000「古代・中世の富士氏」『元富士大宮司館跡』富士宮市教育委員会

静岡県 1930『静岡縣史』第一巻

富士宮市 1971『富士宮市史』上巻

富士宮市 1988『富士宮市の自然』

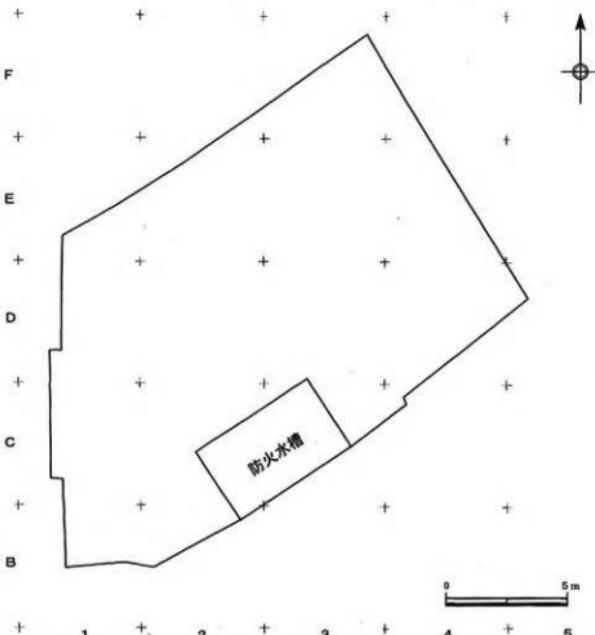
富士宮市教育委員会 1996『浅間大社遺跡』

富士宮市教育委員会 2000『元富士大宮司館跡』

馬淵野行雄 2000『元富士大宮司館跡の変遷と復元』『元富士大宮司館跡』富士宮市教育委員会

若林 淳之 1996『浅間大社境内遺跡について』『浅間大社遺跡』富士宮市教育委員会

渡井 正二 1996『出土陶磁器類と浅間大社の信仰』『浅間大社遺跡』富士宮市教育委員会

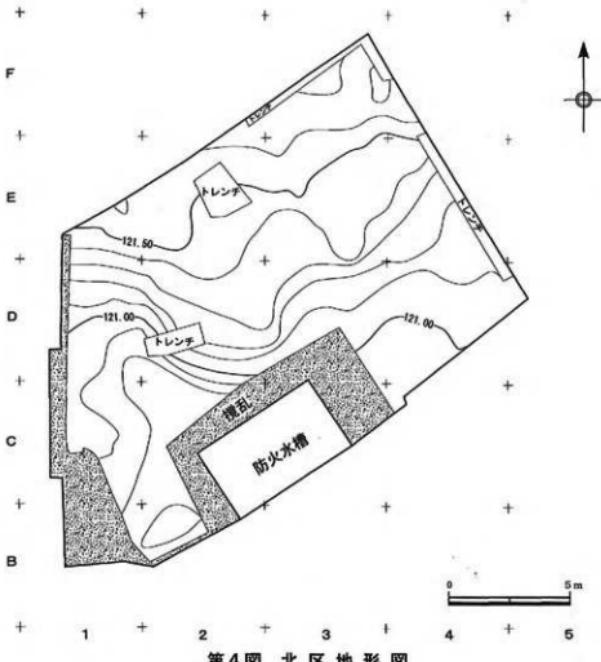


第3図 グリッド配置図

第Ⅱ章 第3次発掘調査

1. 調査の経過

今回の調査は、富士宮市消防団第3分団結所（宮本区）建設事業に伴うものである。事業予定地が浅間大社遺跡内であることから建設工事に先立ち平成14年6月に富士宮市教育委員会によって事業予定地内の確認調査が行なわれた。その結果、事業予定地内に古墳時代と中世の遺物包含層の存在が確認された。この確認調査の結果を踏まえて平成14年10月2日から調査を開始した。調査区は社殿北西側の丘陵部、杉林の南西端に位置し浅間大社参拝者用の道路沿いにあることから最初に調査区の西側と南側に防護ネットを設置し参拝者および通行者の安全を確保した。また調査区内には伐採された樹木の切り株や防火水槽等が存在していたことから、調査はまず重機で慎重に調査区内の表土層の排除および防火水槽周辺の搅乱土の排除を行ない表土層の完了した範囲から作業員による掘り下げを開始した。また調査区内に所在する切り株の抜根作業も調査と並行して行なった（第4図）。



第4図 北区地形図

調査を進めていくにしたがい遺物の出土も増加し、2層では近世～近代にかけての遺物が多く出土したほか、区画溝（1号溝）も1条検出された。6層では平安時代～中世にかけての遺物が出土し、建物跡・土坑等の遺構も検出された。また、D・E-3グリッドとE・F-3グリッドにて確認された遺物集中区については出土状況図の作成、写真撮影を行なった後、遺物の取り上げを行なった。更に調査を進め、暗黄褐色土層にて建物跡、溝状遺構、土坑等の遺構が検出された。検出された遺構は順次掘り下げ、実測作業、セクション写真・完掘写真の撮影等の処理を行なった。1号溝西側部分ではその形状を確認する為に西壁側を一部拡張して調査を行なった。なお遺物は遺構内出土遺物および遺物集中部のものはドットで取り上げを行ない、それ以外の遺物はグリッド一括取り上げとした。土層確認は調査区の北壁・東壁および調査区内に設定した東西・南北方向のセクションベルトにて行なった。10月22日には調査区の地形測量を、11月20日には遺構測量・調査区及び調査区周辺の地形測量、高所作業車による遺構・調査区全景の写真撮影を、11月22日に残りの遺構測量・地形測量を行ない現場での調査を完了した。11月25日から切り株・堆土の搬出、防護ネット、コンテナハウスの撤去作業を行ない11月29日に全ての作業を終了した。

（武田）

2. 層序（第5・6図）

今回調査を行なった浅間大社遺跡第3次発掘調査地点は第1次発掘調査（平成6年度）、第2次発掘調査（平成7年度）地点と本殿を挟んだ北西側の杉林の緩やかな丘陵上に所在している。

調査区内の土層堆積状況の観察は調査区北壁・東壁ならびに調査区中央に設定した東西・南北セクションベルトを使って行なった。（第5・6図）なお土層色調の観察は『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を用いて行なった。

土層

第1層 黒色土（表土層） 7.5YR1.7/1

土の締まり・粘性は共に弱く、層内に粒径2～4mmの小石を多く含む。

第2層 黒褐色土 10YR3/1

土の締まりは強く粘性はやや強い。層内に粒径2～4mmの小石・細砂を多く含みまた、細かいオレンジスコリア粒もやや含む。

第3層 黄褐色砂礫層 10YR5/6

土の締まりはやや強く粘性は弱い。層内に粒径1～2mmの小石・砂を含む。

第4層 黒色土 7.5YR2/1（近世～近代遺構確認面）

土の締まりは強く粘性はやや強い。層内に粒径2～3mmの小石・細砂を多く含みまた、粒径1～2mmのオレンジスコリア粒も含む。

第5層 明黄褐色土 10YR6/8

土の締まり・粘性は共にやや弱い。層内に細かいオレンジスコリア粒・粒径1～2mmの小石・砂を含む。

第6層 黒色土 7.5YR2/1（平安～中世遺物包含層）

土の締まりは強く粘性はやや強い。層内に粒径2～5mmの小石・細砂を多く含む。

第7層 明黄褐色土 10YR6/8

土の締まりはやや強いが粘性はやや弱い。層内に粒径1mm前後のオレンジスコリア粒・粒径1~3mmの小石・細砂を含む。

第8層 暗褐色土 7.5YR3/3

土の締まりはやや強く粘性は強い。層内に細かいオレンジスコリア粒・粒径1~3mmの小石・砂を含む。

第9層 明黒褐色土 7.5YR3/4

土の締まりは強く粘性はやや強い。層内に細かいオレンジスコリア粒・粒径2~3mmの小石・細砂を含む。

第10層 暗褐色土 7.5YR3/3

土の締まりはやや強く粘性は強い。層内に粒径2~3mmの小石・細砂を含みオレンジスコリア粒もやや含む。

第11層 黄褐色砂質土 10YR5/6

土の締まりは強いが粘性は弱い。層内に粒径1~3mmの小石・細砂を含む。

第12層 黒色土 7.5YR2/1

土の締まり・粘性は共に強い。層内に粒径1~2mmのオレンジスコリア粒・粒径1~3mmの小石・砂を含む。

第13層 暗褐色土 7.5YR3/3 (古墳時代遺物包含層)

土の締まり・粘性は共にやや強い。層内に粒径2~5mmの小石・砂を含む。

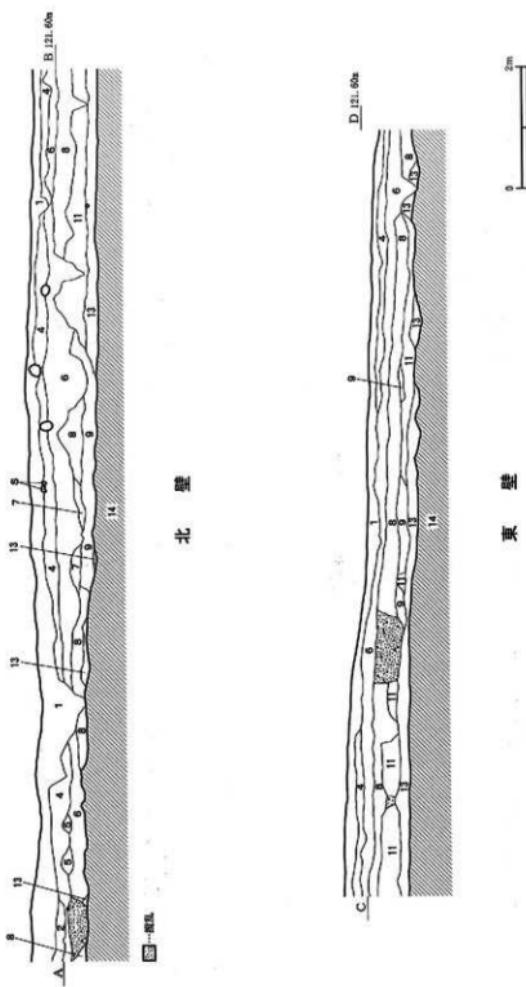
第14層 暗黄褐色砂質土 10YR4/3 (地山層)

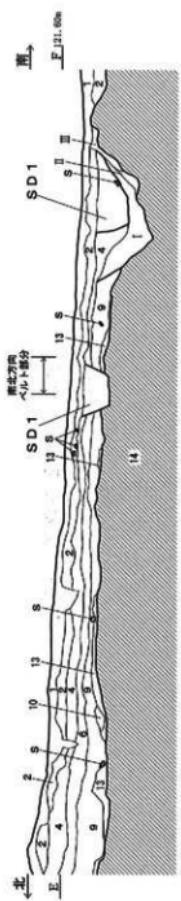
土の締まりは強く粘性はやや強い。層内に粒径2~3mmの小石・砂を多く含む。

調査の結果、調査区の地形は北側から南方向に向かって緩やかに傾斜しており、第4層の黒色土層は近世~近代に、第6層の明黒色土層は平安時代~中世に、第13層の暗褐色土層は古墳時代に該当していることが確認された。いずれの構造も14層の地山層まで掘り込んで構築されている。また東西方向のセクションベルトの西側部分では中世以前の自然流路跡が検出されたが流路の南側は防火水槽で、また西側部分は近年のゴミ等の埋め立てにより削平されており、流路の西側の立ち上がりは検出することは出来なかった。流路の底部分には川砂が厚く堆積しており、長期にわたって河川が流下していたことが推測される。調査区南壁部分は防火水槽の埋設工事で、また調査区南西部分は切り株やゴミの埋め立て等により地山直上付近まで搅乱を受けていることが判明した。

(武田)

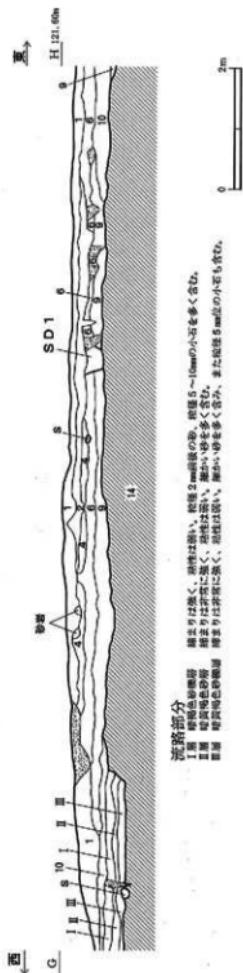
第5図 土層断面図①(北壁・東壁)





1号土坑
1層 砂質土、細さり、活性高にやや低い、細かい砂、粒径 1 ~ 3mmの小石を含む。
2層 細粒砂土、細さり、活性にやや高い、細かい砂、粒径 1 ~ 2mmの石を含む。
3層 細粒砂土、細さり、活性高にやや低い、細かい砂、粒径 2 ~ 3mmの石を含む。細かいスコリアをやむ。

南北セクションベルト



道路部分
1層 砂質土、細さり、活性高にやや低い、粒径 2 ~ 3mmの石を含む。
2層 砂質土、細さり、活性は低く、粒径は大きい、細かい砂を多く含む。
3層 砂質土、細さり、活性は非常に低く、粒径は大きい、細かい砂を多く含む。また粒径 5mmの小石も含む。

第6図 土層断面図②(南北・東西セクションベルト)

3. 遺構

今回の調査では、SB 1軒、SD 1条、SK 9基が検出された（第7図）。これらの遺構は出土遺物から古墳時代・平安時代～中世・近世～近代の遺構と考えられる。これらの遺構は調査区全域でみられ緩やかな緩傾斜面に所在している。

SB 1（第8図）

SB 1は調査区北東のE-3グリッド付近にて検出されSK 7・SK 8と切り合い関係にある。建物跡の平面形態は隅丸方形を呈し、長軸4.22m、短軸3.85m、深さ26cm、床面積は15.75m²を測る。建物跡の床面は地山の暗黄褐色砂質土層を掘りくぼめてほぼ平坦な面を構築して使用している。また床面の北西角付近と北東角付近にて2基のピットが検出された。P 1の平面形態はやや長楕円形を、断面形態は上の開くU字形を呈し長軸66cm、短軸54cm、深さ34cmを測る。ピットの底付近からカワラケ底部片が1点出土している。P 2の平面形態はほぼ円形を、断面形態は逆台形を呈し長軸57cm、短軸55cm、深さ27cmを測る。遺構内からは2基のピットしか検出されなかつことからこの建物跡は2本の柱に梁をわたりそれに屋根をのせた簡単な構造の建物ではなかつたかと推測される。建物跡の覆土の堆積状態は建物跡縁辺部の崩落が確認され、床上より細かいスコリア粒の混入した黒色土が自然堆積している。また建物跡内の西壁付近で僅かに細かい炭化物の出土が観察された。

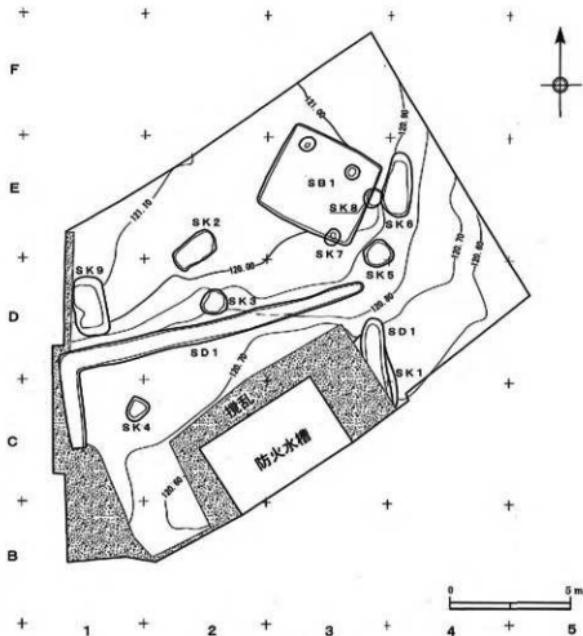
SD 1（第9図）

SD 1は調査区の中央のD-1グリッドからD-3グリッドにて検出された。検出された溝状遺構はコの字状を呈し、区画溝の意味合いが強いと考えられるが、区画内は防火水槽の埋設により搅乱をうけている。北溝は東北東から西南西に向けてほぼ直線状に流下し、調査区西壁端で南方向に屈折し、西溝へとつながり流下する。西溝は調査区西壁端で北から南方向に流下し、調査区外に延びていると推測されるが調査区南西部分は後世の搅乱により破壊されている。北溝と東溝の屈折部分は切れている。東溝はD-3グリッドにて北から南方向に流下し、調査区外に延びていると推測されるがC-3グリッドでSK 1と切り合い、また防火水槽の埋設による搅乱を受けており遺構の大部分は破壊されている。

北溝・西溝・北溝・東溝の屈折角度はいずれも約100°を測り、西溝と東溝の溝間は12.4mを測る。北溝の底部は東から西へと緩やかに傾斜しており、その幅も西側に進むほど広くなっていく。検出されたSD 1の規模は北溝が長さ12.85m、幅が東側で上場56cm・下場42cm、深さ24cm、西側で上場82cm・下場66cm、深さ38cmを測り、主軸方向はN-74°-Eを指向し、その平面形態は直線状を、断面形態は逆台形状を呈し、溝底は平坦となる。西溝が長さ4.02m、幅が上場約94cm・下場80cmを測り、主軸方向はN-7°-Wを指向し、その平面形態は直線状を、断面形態は逆台形状を呈し、溝底は平坦となる。東溝が長さ350cm、幅が上場で約88cm、下場で52cm、深さは32cmを測り、その主軸方向はN-5°-Wを指向し、その平面形態は直線状をなすと推測されその断面形態は逆台形状を呈し、溝底は平坦となる。遺物は北溝の西側部分で近代の甕底部が1点出土している。覆土の堆積状況は締まりのやや強く粘性はやや弱い黒褐色土（1層）、締まりの強く粘性のやや弱い黒褐色土（2層）、締まりのやや強く粘性の弱い黄褐色土（3層）の3層に分けられる。

SK 1（第9図、第2表）

SK 1はD-3グリッドにてSD 1に切られるかたちで検出され、SK 1の南側部分は近年の防火水槽建設によりその大部分が削平されていた。残存部分から推測してその平面形態は長楕円形を



第7図 北区全体図

呈すると考えられ、その断面形態は船底状を呈する。遺構の規模は推定で長軸約309cm、短軸約152cm、深さは92cmを測り、主軸方向はN-15°-Wを指向する。

遺物は覆土内から多くのカワラケ片が出土している。

SK 2 (第10図、第2表)

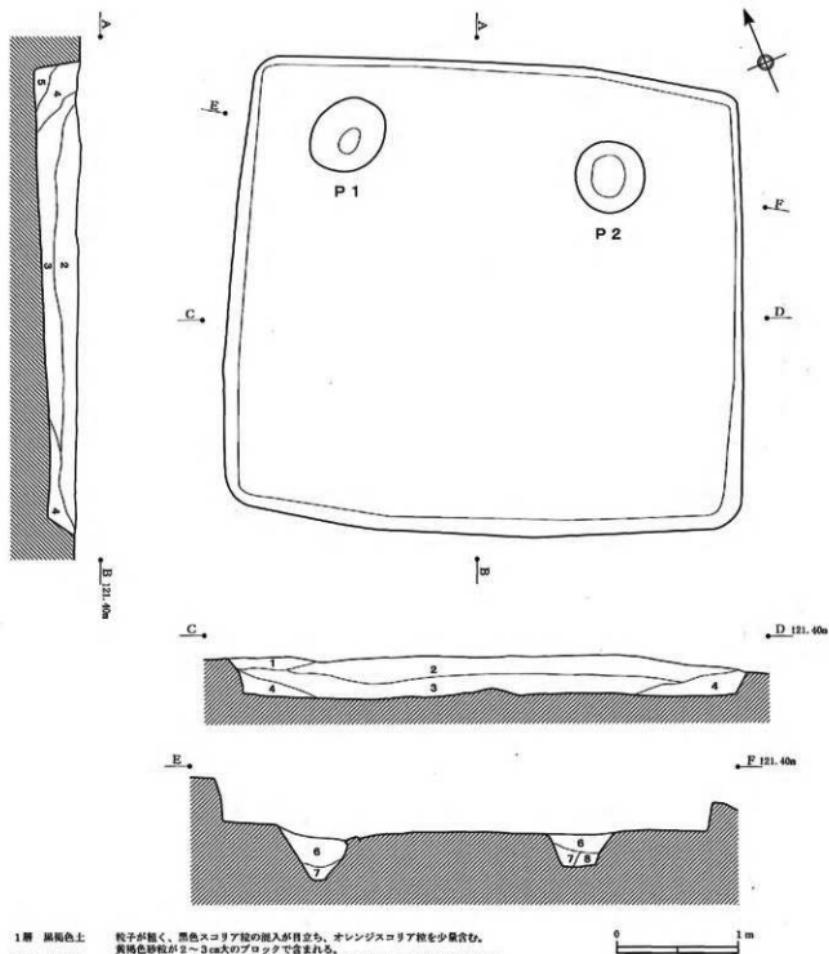
SK 2はE-2グリッドにて検出された。遺構の平面形態は長楕円形を呈し、その断面形態は皿状を呈する。遺構の規模は長軸204cm、短軸111cm、深さ22cmを測り、主軸方向はN-54°-Eを指向する。土坑の北西側の壁面は緩やかに、南西側の壁面は急峻に立ち上がる。遺構の中央東側付近の覆土中から底部にかけて角礫がまとまって検出している。

SK 3 (第10図、第2表)

SK 3はD-2グリッドにて検出された。遺構の平面形態は椭円形を呈し、その断面形態は浅い皿状を呈する。遺構の規模は長軸109cm、短軸103cm、深さ20cmを測り、主軸方向はN-48°-Eを指向する。

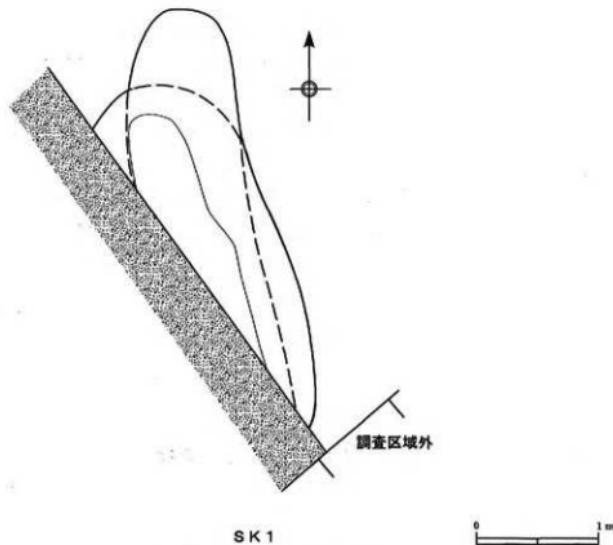
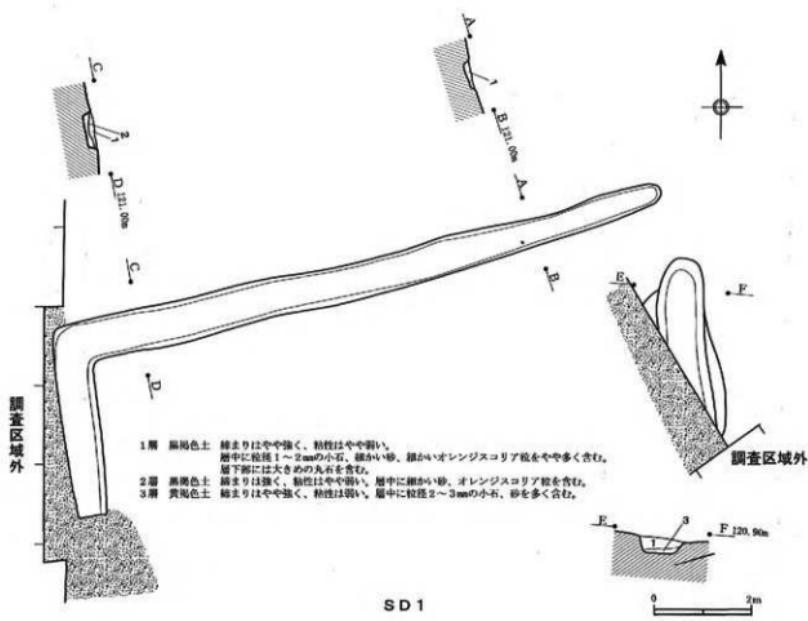
SK 4 (第10図、第2表)

SK 4はC-1グリッドにて検出された。遺構の平面形態は不整椭円形を呈し、その断面形態は浅い皿状を呈する。遺構の規模は長軸99cm、短軸81cm、深さ12cmを測り主軸方向はN-46°-Eを指向する。



- 1層 黒褐色土 杢子が粗く、黒色スコリア粒の混入が目立ち、オレンジスコリア粒を少數含む。
黄褐色砂が2~3cmの大さのブロックで含まれる。
- 2層 黒褐色土 杢子が粗く、黒色スコリア粒の混入が目立つ。オレンジスコリア粒が少數含まれる。
- 3層 黒褐色土 2層より杢子が細くなり、黄褐色砂の杢子の混入が目立つようになる。
- 4層 純い黒褐色土 杢子の細かい層で構成も強まる。
黄褐色砂がブロック状の杢子で含まれる。
- 5層 黒色土 砂層。細程度のスコリア粒の混入が目立つ。
- 6層 黒色土 オレンジスコリア粒の混入が目立つ。杢まりはやや強い。
- 7層 黒色土 杢子の細かい層で黄色スコリア粒の混入が目立つ。
- 8層 細い黃褐色 土 岩より黃褐色が増し、杢子が細くなる。
黄褐色砂質ブロックが主体を構成する層で構成も強い。

第8図 SB1 実測図



第9図 SD 1・SK 1実測図

SK 5 (第10図、第2表)

SK 5はE-3グリッドとE-4グリッドの境にて検出された。遺構の平面形態は楕円形を呈し、その断面形態はU字状を呈する。遺構の規模は長軸117cm、短軸116cm、深さ34cmを測り、主軸方向はN-31°-Eを指向する。

SK 6 (第11図、第2表)

SK 6はE-3グリッドとE-4グリッドの境にて検出された。遺構の平面形態は長楕円形を呈し、その断面形態は浅いU字状を呈する。遺構の規模は長軸263cm、短軸122cm、深さ27cmを測り、主軸方向はN-14°-Eを指向する。

SK 7 (第11図、第2表)

SK 7はE-3グリッドにて検出されSB 1の南壁と切り合い関係にある。遺構の平面形態は楕円形を呈し、その断面形態は深いU字状を呈する。遺構の規模は長軸71cm、短軸53cm、深さ49.5cmを測り、主軸方向はN-19°-Eを指向する。

SK 8 (第11図、第2表)

SK 8はE-3グリッドにて検出された。遺構西側部分がSB 1、遺構東側部分がSK 6と切り合ひ関係にある。遺構の平面形態は楕円形を呈しその断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は長軸79cm、短軸69cm、深さ21cmを測り、主軸方向はN-8°-Eを指向する。遺物は覆土中よりカワラケの底部が1点出土している。

SK 9 (第11図、第2表)

SK 9はD-1グリッドの西壁付近にて検出された。遺構の平面形態は隅丸長方形を呈し、その断面形態は逆台形状を呈する。遺構の規模は長軸246cm、短軸138cm、深さ36cmを測り、主軸方向はN-21°-Wを指向する。
(武田)

第2表 SK計測表

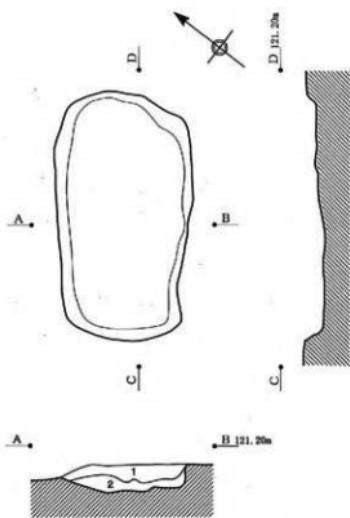
(単位: cm)

遺構名	規 模(長軸×短軸×深さ)	主軸方向	平面形態	断面形態	残存状況
SK 1	(309) × (152) × 92	N-15°-W	長 楕 円 形	船 底 状	一部残
SK 2	204 × 111 × 22	N-54°-E	長 楕 円 形	皿 状	全 周
SK 3	109 × 103 × 20	N-48°-E	楕 圓 形	浅 い 皿 状	全 周
SK 4	99 × 81 × 12	N-46°-E	不整楕円形	浅 い 皿 状	全 周
SK 5	117 × 116 × 34	N-31°-E	楕 圓 形	U 字 状	全 周
SK 6	263 × 122 × 27	N-14°-E	長 楕 円 形	浅いU字状	全 周
SK 7	71 × 53 × 49.5	N-19°-E	楕 圓 形	深いU字状	全 周
SK 8	79 × 69 × 21	N-8°-E	楕 圓 形	逆 台 形 状	3/4残
SK 9	246 × 138 × 36	N-21°-W	隅 丸 長 方 形	逆 台 形 状	一部欠

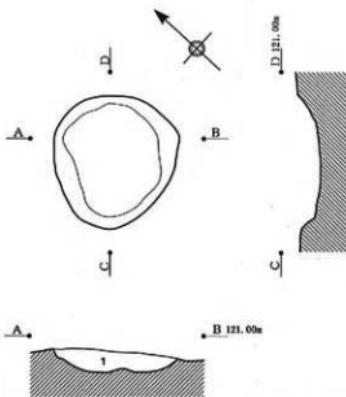
遺物集中区 (第12図)

遺物の包含層を調査中に、遺物がやや集中して出土している箇所を調査区の東側で2箇所確認している。D-3グリッドからE-3グリッドにかけての第6層中より検出された集中区を遺物集中区①、E-3グリッドにおいてSB 1と重複して、それよりも古い第13層中で確認された集中区を遺物集中区②としている。

それぞれは、層位的に異なる出土を示しているが、いずれも南東方向に向かう傾斜地の角度の変わる地形の返還点付近で検出されている。



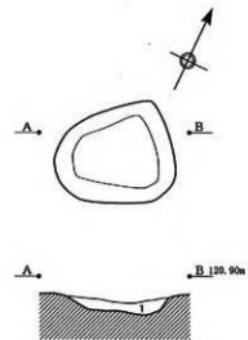
1層 黒褐色土 繋まりは強く、粘性共にやや強い。層中に粒径3mmの小石。
2層 墓園色土 繋まりは強く、粘性共にやや弱い。層中に細かい砂、粒径2~4mmの小石をやや多く含み、粒径1~2mmのオレンジスコリア粒をわずかに含む。



1層 黒褐色土 繋まり、粘性共に強い。層中に細かいオレンジスコリア粒、細かい砂をやや多く含み、粒径3mm前後の小石を僅かに含む。

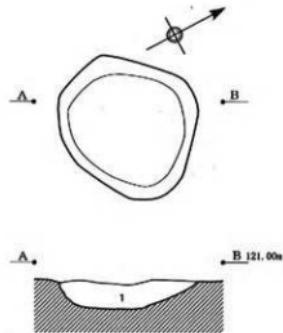
SK 2

SK 3



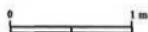
1層 黒褐色土 繋まり、粘性共にやや強い。
層中に粒径1~2mmのオレンジスコリア粒、
小石、砂をやや多く含む。

SK 4

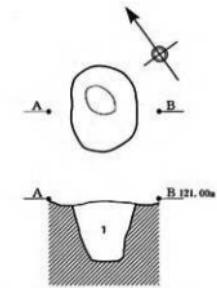
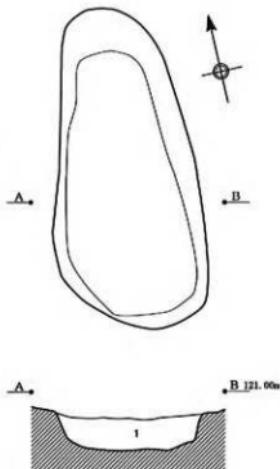


1層 黒褐色土 繋まり、粘性共にやや強い。
層中に粒径1~2mmのオレンジスコリア粒、
小石、砂をやや多く含む。

SK 5



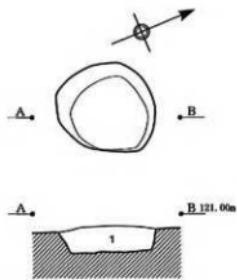
第10図 SK 実測図①



1層 黒褐色土 粘まりは強く、粘性はやや強い。
層中に粒径1~2mmのオレンジスコリア粒、細かい砂、
粒径1~3mmの小石を含む。

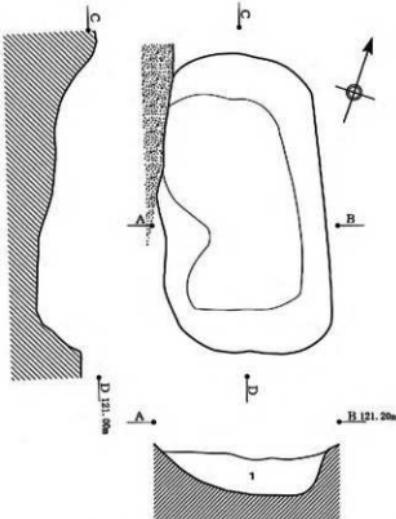
1層 黒褐色土 粘まりはやや強く、粘性はやや弱い。
層中に粒径1~2mmのオレンジスコリア粒と細かい砂を含む。

SK 6

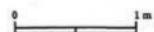


1層 黒褐色土 粘まりは強く、粘性はやや弱い。
層中に粒径1~2mmのオレンジスコリア粒、
細かい砂、粒径2~3mmの小石を含む。

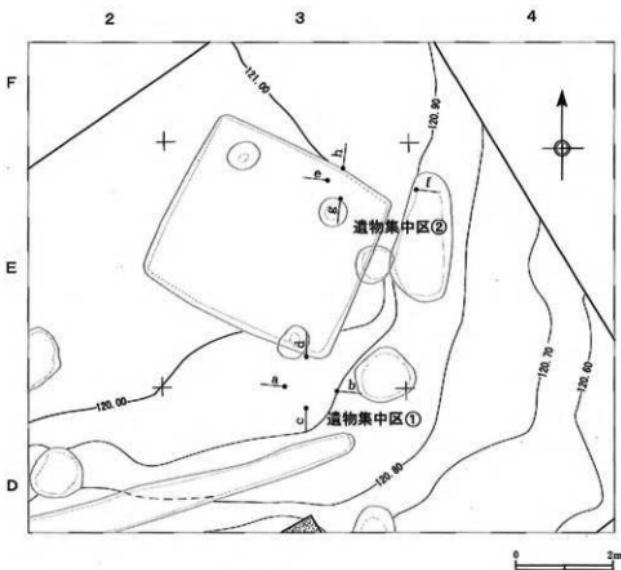
SK 8



1層 細褐色土 粘まり、粘性共にやや弱い。層中に粒径2~4mmの小石、
細かいオレンジスコリア粒を含む。



第11図 SK実測図②



第12図 遺物集中区位置図

4. 遺 物

a. 遺物出土状況

現在の浅間大社の北西側に位置する第3次の発掘調査地点（北区）では、第Ⅱ章2の層序の項で述べているように1mほどの土層が堆積する中で、層位的に遺物の出土状況を捉えることができている。遺物は5世紀～7世紀、12世紀～15世紀、19世紀のものに大きく分けられるが、表土直下に19世紀の陶磁器を含む層が見られる。この層は表土である第1層の影響を受けており全域では確認されておらず、堆積の様子は分からぬが、調査区の西側で確認されている自然流路側には検出されていないことから、標高が下がる部分ではすでに消失して様子が窺われ、この層自体、本来は比較的安定していた平坦な堆積を示していたものと捉えることができる。

硬質の暗黄褐色砂質土層の直上に古墳時代の第13層が認められている。調査区の北東側で偏在して分布しており、この調査地点に主体的な広がりを示すものではない。古墳時代中期～後期の遺跡分布域が神社の北側に広がる平坦地にあることを示唆する状況を示していると言える。

この13層および2層とに挟まれたほぼ中央部分に平安時代から室町時代の遺物を包含する第6層が認められるわけであるが、この層は、調査区のほぼ全域で確認されており多量の遺物を包含するものであり、現地形に左右されることなく平坦な堆積を示すことを特徴としている。

これらの遺物包含層に対して第4層や第9層のような遺物を包含しない無遺物層が認められた点も大きな特徴として指摘することができる。

造構に伴う遺物は、北区の竪穴状の施設であるSB 1 から出土している土器および山茶碗類を取り上げることができる。SB 1 からはその覆土中から遺物の出土が認められるが、いずれも直接SB 1 に伴うものではない。後出的に投棄されたような状況で完形のものはない。遺物は造構の北側に偏る状況で分布して出土している。

この造構においてはその柱穴と思われるP 1 から土器（第17図13）が出土している。この土器は口縁部を欠損する壺底部の破片資料であり、穴の底部近くで発見されたものである。その出土位置から柱の掘り方内からの出土として捉えることができ、この施設の構築段階に伴うものと考えられる壺である。建物建築時の地鎮にかかるものであろうか。

第3次調査では、近代の造構と思われるSD 1 の底面から壺底部の破片（第18図25）が出土している。

この調査では前述のように、顕著に遺物を含む遺物包含層が確認されているが、地点によっては土器類が大形破片で、やまとまと出土する部分を認めることができる。今回の調査では2箇所、そのような箇所を検出している。

遺物集中区①は、D-3 グリッドからE-3 グリッドにかけて確認することができた遺物の集中区である（第14図）。遺物の分布は南北に帯状の分布を示すもので、1点の須恵器片以外カワラケ片で構成されている。出土は6層中の確認であるが、南北方向で顕著に認められるように浅い皿状の落ち込みに沿うような垂直分布を示している。出土カワラケは、この集中区で接合関係を持つものがあり、一定の範囲で破碎されて廃棄された様子を窺うことができる出土状況を示している。また、この集中区①の大きな特徴としては、大形破片としての手づくねのカワラケが含まれる点を取り上げることができる。搬入品としての手づくねカワラケは、全体としても、その構成比が5%に満たないものであるが、この集中区①では、目立った出土を示していると言え、ここだけで3個体が確認されている。

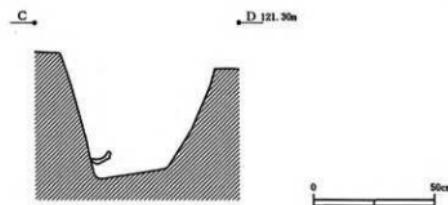
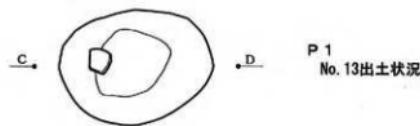
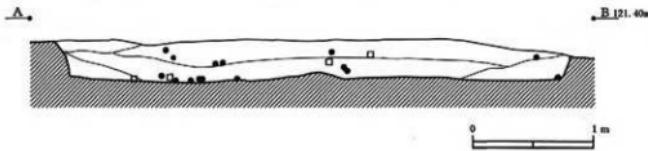
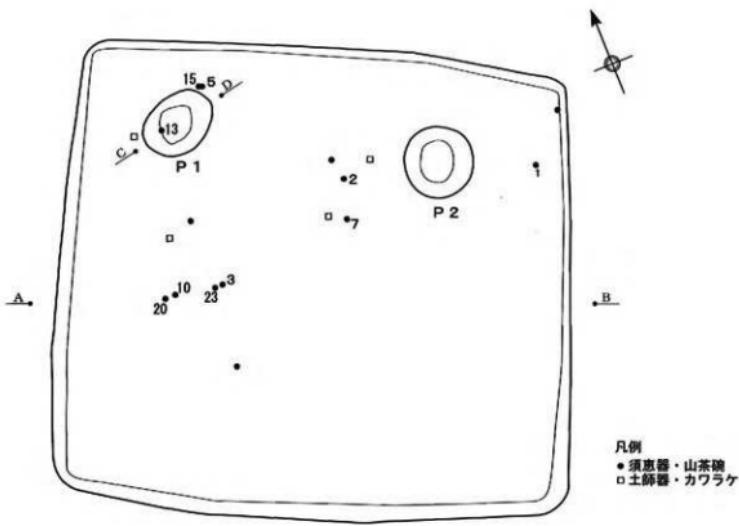
遺物集中区②はE-3 グリッドにおいて確認された遺物の集中部分である（第15図）。SB 1 と重複関係にあり、それよりも古い。遺物の構成は土器類であるものの、それぞれ古墳時代前期のものから平安時代のものまで含まれており、相互の関連はない。遺物集中区①のような造構としての認識は持てるものではないが、第13層における遺物出土状況の一端を表しているものとして掲載している。

b. 出土遺物（第16～22図）

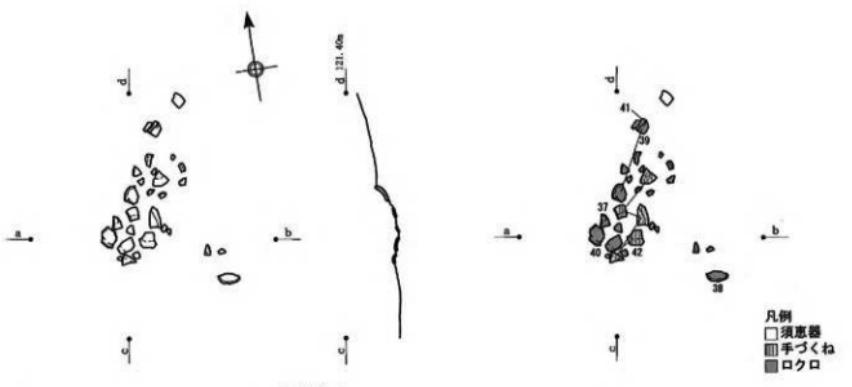
出土遺物は、古墳時代前期から近現代まで及んでいるが、平安時代から中世にかけてのものがその大半を占め、その中でもカワラケの出土が目立つ。カワラケは、ロクロ成形され、底部に回転糸切り痕を残す「ロクロカワラケ」が主体で、在来の型式として捉えることができる。このカワラケは、非常にきめが細かく、雲母や角閃石を含む胎土で、焼成が比較的軟質であるといった特徴を持つものである。

第3次発掘調査では、このカワラケを含む土器類が一定のまとまりを持って出土した一括資料としてSB 1 と遺物集中区①の例を上げることができる。

SB 1 出土の土器類（第17図）は、山茶碗とカワラケで構成されるもので、すべて破片資料であり、SB 1 の覆土中からの出土品である。1は高台付の山茶碗で旗指古窯（島田）の製品で、12世紀前半のものとして考えることができる（註）。2は外面の灰釉が顕著な壺？口縁部破片であるが、小破片のため全体の形状はよく分からず。1と同様に旗指古窯のものであろうか。

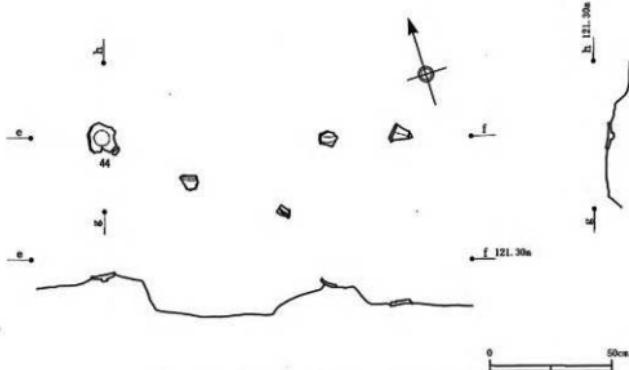


第13図 SB 1 遺物出土状況



第14図 遺物集中区① 遺物出土状況

0 50cm



第15図 遺物集中区② 遺物出土状況

0 50cm

カワラケはロクロのカワラケで、平底のものと足高高台のもの、柱状高台のものとの共伴が知られる。足高高台付壺である14～19は残りの悪いものがほとんどであるが、一応11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる（川上1986）。また、柱状高台付壺である20～22は、その型式より同じく11世紀後半～12世紀前半の年代が想定される。このようなカワラケと前述の山茶碗の組み合わせからSB 1は12世紀前半の建物跡であると思われるのである。

23はこの時期より古い段階の須恵器蓋の破片であり、混入品と思われる。

SD 1からの出土としては、24と25を取り上げているが、24はSD 1の構築以前のカワラケで、混

入したものであろう。25はSD 1の底面から出土している陶器の甕底部破片である。明治以降のものと思われる。

土坑は9基確認されているが、遺物を内包するものは少ない。SK 1出土のカワラケとしては26～33を上げている。小型のコースター状の26、28と小型の皿状になる27、底径と口径との比があまり大きくなじく皿状の29、杯になるかどうか分からぬやや深い碗状の33などが見られる。

この内、28は口唇部にススの付着が顕著な灯明皿である。これらのカワラケ類は、SB 1に比べて明らかに後出の要素が目立ち13世紀後半の年代が想定されるものである。

34はSK 5出土のカワラケで、全体の1/2程度が残存しているもので、内縁気味の体部とやや突出気味の底部からなる小降りの杯である。やや型式的な特徴に乏しい器形であるが12世紀代のものと思われる。

37～43は、カワラケが集中して発見された遺物集中区①からの出土である。37～41は在地系のロクロカワラケであるが、底部破片資料のため全体の器形のよく分からないものが多い。その中で、38、40、41については、内外面とも全面にススの付着が施される黒色処理の痕が見られる。これらのカワラケとともに42、43の手づくねカワラケが共伴して発見されている。その器種構成比がそれほど大きくなはないものであるにもかかわらず、この集中区では最低でも3個体が確認されており、極めて特異な出土を示していると言えるものである。この42、43は互いに法量の差があり、大型と小型に分けて捉えられものであるが、その他の型式はよく似ている。両方とも京都系の白色カワラケの系譜に乗るものと思われるもので、硬質の焼成で薄手の器厚を示す明らかな搬入品である。その型式は京都系の要素をよく備えているわけであるが、ただ、内面に認められる粗いハケメの痕は極めて特異な整形であると言える。近接する大宮城跡においても一定量このような手づくねカワラケが出土しているが、ハケメが施される例はないようである。

遺物集中区①のカワラケ群は、この手づくねカワラケの型式から14世紀の後半段階の年代が考えられる（鷹柄1999）。

44は遺物集中区②から出土した外面の灰釉が顕著な灰釉陶器の杯蓋かと思われるもので、9世紀後半段階の年代が想定される。

45～125のカワラケは、各グリッドの遺物包含層出土として捉えたものである。一見して多型式に亘ることが分かる。52～55、71、75、95、98が柱状高台で、55と98に外面黒色処理が認められる。76、94、116は足高高台の破片で、遺物包含層中にも一定量含まれる様子が分かる。

平底のカワラケは、その多くがロクロ成形で底部に回転糸引き痕を残すが、56、59、61などの小型の皿状を示すものの中に底部をナデ整形で仕上げられている一群が存在する。胎土などは回転糸引き痕を残すものと変わらず、在地のものとして考えることができる。ここで掲示している3例のように、小型品である以外は、底部整形と形態との相関性は認められない。平底カワラケは、58や73のような体部が外傾する小型の皿、59～61や85などの直立気味の体部を示す小型の皿、緩やかに外傾する97、内巻しながら広がる体部の77や78などに大きく分けることができる。これらは、さらに59と61のように体部の内巻傾向の違いや77と78のような口唇部の形態差により細分される。このように、底部整形の違いを含め、その型式は多種に分類されるものである。それは、それぞれに時間差が内在していると考えができる状況を示しているとも言えるのである。

これらロクロカワラケの中には、内面に線刻が施される110や125、外面にそれ様のものが見られる99などがある。明らかに文様とするにはやや不規則な構成であるといえるが、前者などは明

隙にその痕を認めることができ、110には一部にヘラミガキが残っている。青磁碗における文様の模倣であろうか。

96は遺物集中区①出土の42、43と同じ手づくねカワラケの小形品であり、内面にハケメを見ることができる。

149～158は、5世紀後半段階の土器類である。149は須恵器坏蓋、151、152は須恵器高坏脚部破片、153～155が土師器高坏破片である。153は有段高坏の口縁部と思われる。156、157は駿河伊豆型平底坏（駿豆型坏）と称される土師器坏（池谷1999）で底部に木葉痕を残す。

錢貨（第16図）はすべてF-3グリッドからの出土で、相関性が窺えるものである。「永楽通寶」が一点含まれている。

（渡井）

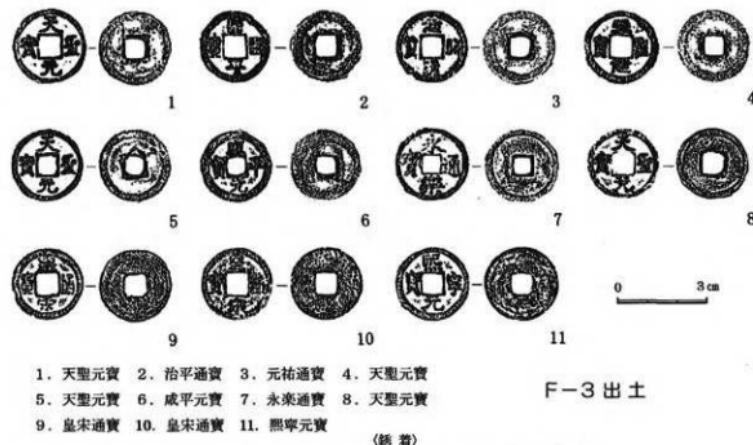
（註）山茶碗の型式については、松井一明氏（袋井市教育委員会）よりご教示していただいた。

（文献）

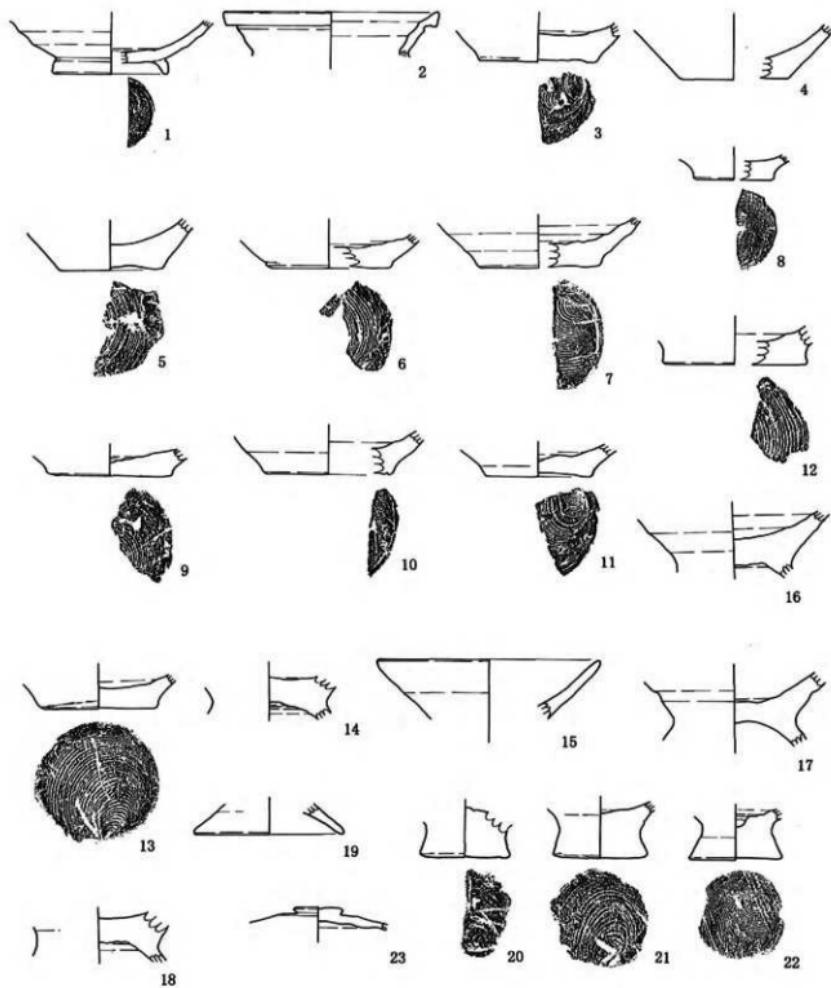
池谷 初恵 1999 「駿河伊豆型平底坏について」『東国土器研究』第5号

川上 元 1986 「足高高台付土器」『シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古第21号 神奈川考古同人会

鈴柄 俊夫 1999 「土師器皿の分類と変遷」『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社



第16図 出土 錢貨

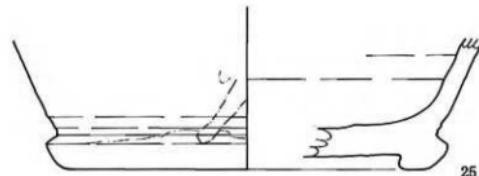


第17図 SB 1 出土遺物

SD 1



24

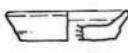


25

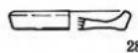
SK



26



27



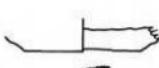
28



29



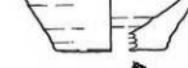
30



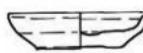
31



32



33



34



35



36



37

38

遺物集中区



40



41



39



44



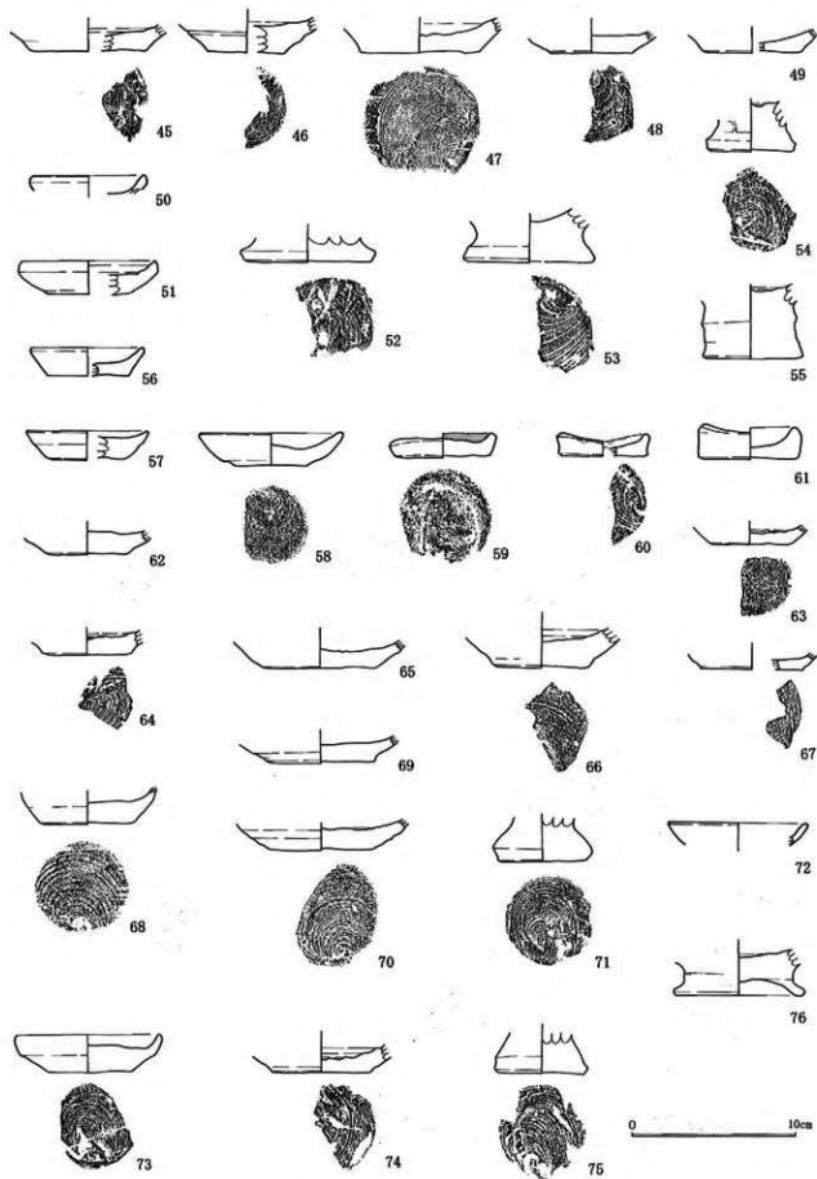
42



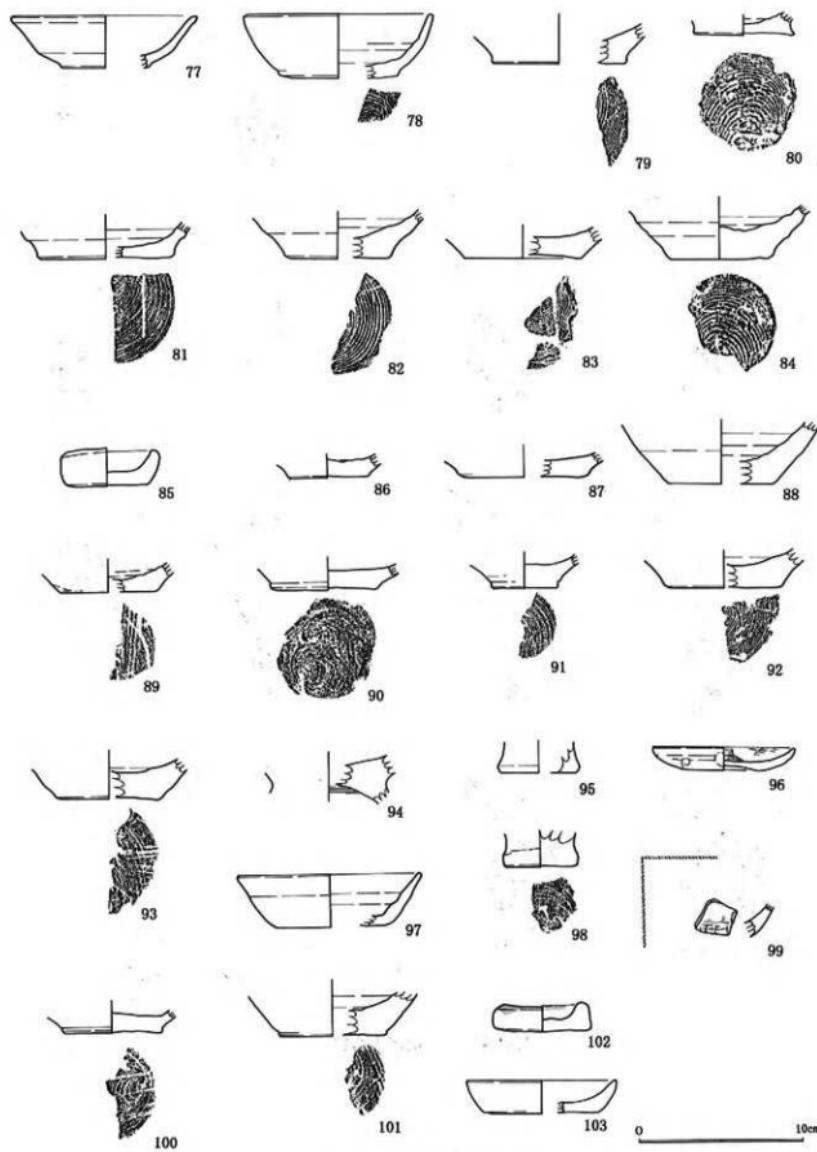
43

0 10cm

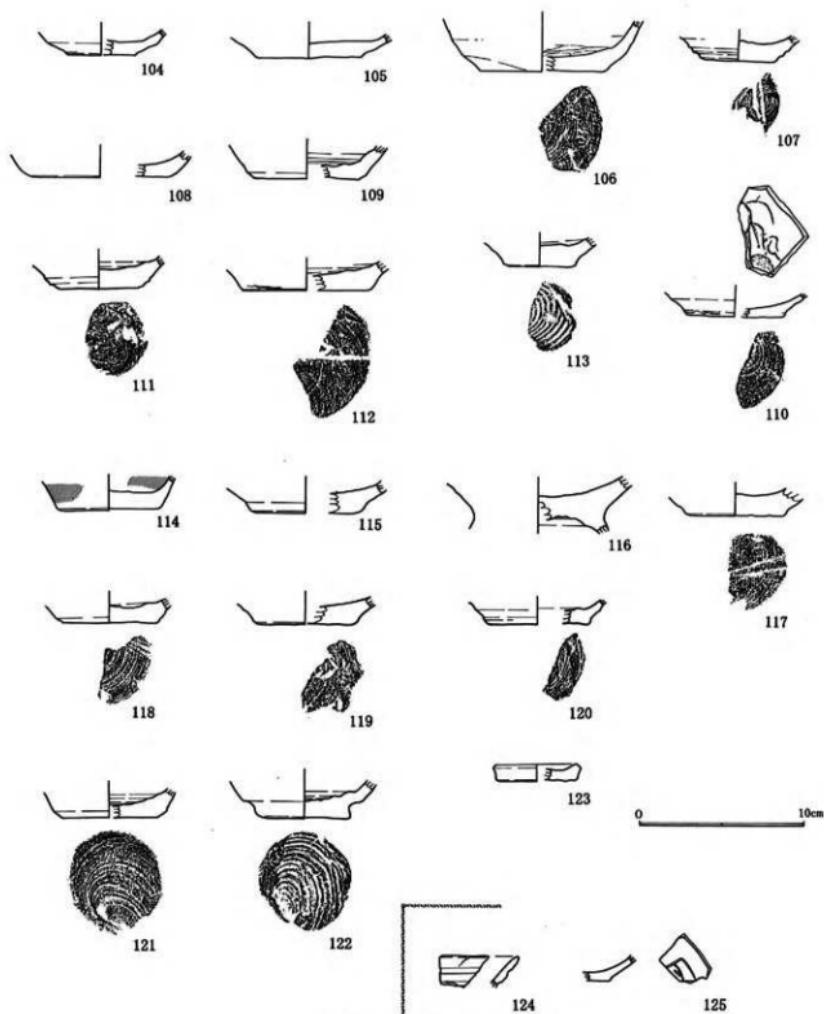
第18図 SD 1・SK・遺物集中区出土遺物



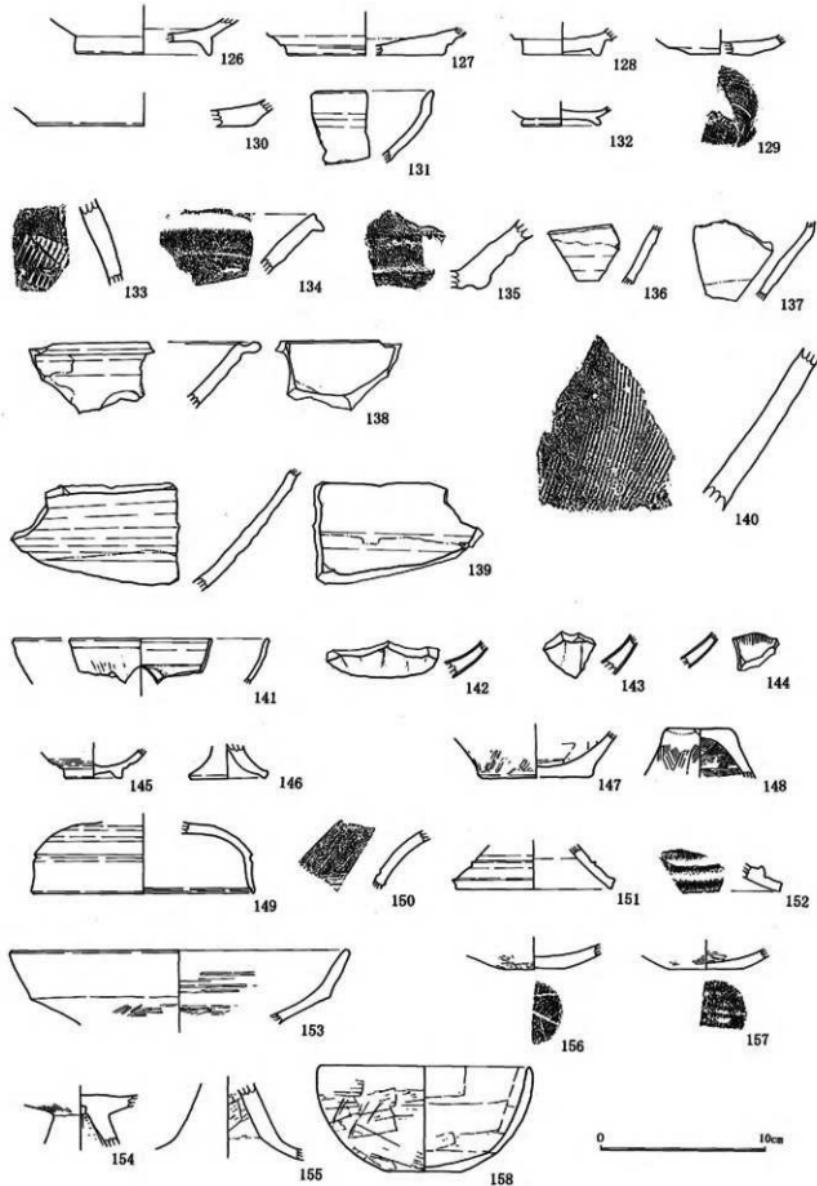
第19図 包含層出土遺物①



第20図 包含層出土遺物②



第21図 包含層出土遺物③



第22図 包含層出土遺物④

第3表 遺物觀察表①

番号	器種	法量			残存率	出土地点	備考
		口径	底径	器高			
1	山茶碗		(7.1)		底部1/3	SB 1	内外面スス付着
2	壺	(12.9)			1/4以下	SB 1	灰釉陶器壺
3	カワラケ		(7.2)		底部1/4以下	SB 1	
4	カワラケ		(6.6)		底部1/4以下	SB 1	
5	カワラケ		(6.6)		底部1/3	SB 1	
6	カワラケ		(7.7)		底部1/4以下	SB 1	
7	カワラケ		(7.4)		底部1/3	SB 1	
8	カワラケ		(5.0)		底部1/3	SB 1	
9	カワラケ		(7.7)		底部1/4	SB 1	
10	カワラケ		(7.8)		底部1/4以下	SB 1	
11	カワラケ		(6.4)		底部1/3	SB 1	故意に口縁欠損
12	カワラケ		(8.8)		底部1/4以下	SB 1	
13	カワラケ		7.2		底部全周	SB 1	P 1 出土
14	カワラケ				接合部1/3	SB 1	足高高台、スス付着
15	カワラケ	(13.4)			口縁1/4以下	SB 1	足高高台?
16	カワラケ				接合部1/2	SB 1	足高高台
17	カワラケ				接合部1/2	SB 1	足高高台
18	カワラケ				接合部1/2	SB 1	足高高台
19	カワラケ		(9.1)		底部1/4以下	SB 1	足高高台、故意に口縁欠損
20	カワラケ		5.6		脚台部2/3	SB 1	柱状高台、故意に口縁欠損
21	カワラケ		5.8		脚台部完存	SB 1	柱状高台
22	カワラケ		5.6		脚台部完存	SB 1	柱状高台
23	坏壺				1/4以下	SB 1	須恵器
24	カワラケ	(10.8)	(6.5)	3.2	1/4以下	SD 1	外面黒色処理
25	陶器甕		(21.6)		底部1/3	SD 1	内面トチン痕、全面鉄錆
26	カワラケ	(7.3)	(6.4)	1.3	1/4以下	SK 1	陶器
27	カワラケ	(7.3)	(5.9)	1.8	1/4	SK 1	
28	カワラケ	(6.7)	(6.9)	1.1	1/3	SK 1	口縁端部スス付着
29	カワラケ	(12.1)	(8.4)	3.1	口縁1/4以下	SK 1	歪みが目立つ。
30	カワラケ		(5.7)		底部1/3	SK 1	
31	カワラケ		7.1		底部3/4	SK 1	外面黒色処理
32	カワラケ		4.6		底部全周	SK 1	外面スス付着
33	カワラケ		(6.7)		底部1/3	SK 1	故意に口縁欠損
34	カワラケ	(8.6)	5.4	2.2	1/2	SK 5	
35	カワラケ		7.8		底部全周	SK 8	割れ口、外面スス付着
36	カワラケ		(5.7)		底部1/4以下	SK 9	
37	カワラケ		(5.2)		底部1/3	集中区①	
38	カワラケ		5.4		底部1/2	集中区①	外面黒色処理
39	カワラケ		(7.3)		底部1/3	集中区①	
40	カワラケ		5.0		底部ほぼ全周	集中区①	外面黒色処理
41	カワラケ		5.5		底部1/2	集中区①	外面黒色処理
42	カワラケ		(8.4)	1.5	1/4	集中区①	手づくね、内面ハケメ整形
43	カワラケ		11.7	2.8	ほぼ完存	集中区①	手づくね、内面ハケメ整形
44	坏壺				1/2	集中区②	灰釉陶器
45	カワラケ		(7.1)		底部1/4以下	C - 2	故意に口縁欠損
46	カワラケ		(4.8)		底部1/4以下	D - 2	
47	カワラケ		7.4		底部ほぼ全周	D - 2	
48	カワラケ		5.2		底部1/2	D - 2	
49	カワラケ		(5.8)		底部1/4	D - 2	
50	カワラケ		(6.8)		口縁1/4以下	D - 2	
51	カワラケ		(8.2)	(5.4)	2.0	D - 2	
52	カワラケ				底部1/3	D - 2	柱状高台
53	カワラケ				底部1/3	D - 2	柱状高台
54	カワラケ				底部2/3	D - 2	柱状高台

第4表 遺物観察表②

番号	器種	法量			残存率	出土地点	備考
		口径	底径	器高			
55	カワラケ		6.0		底部ほぼ全周	D-2	柱状高台、内外面黒色処理
56	カワラケ	(6.8)	(4.9)	1.7	1/4以下	D-3	底面ナデ整形
57	カワラケ	(7.4)	(4.8)	1.7	1/3	D-3	
58	カワラケ	(8.5)	4.6	2.0	1/3	D-4	
59	カワラケ	5.8	5.8	1.5	2/3	D-4	底面ナデ整形、内外面スス付着
60	カワラケ	(5.0)	(5.4)	1.4	1/3	D-4	口唇部スス付着
61	カワラケ	5.4	6.1	2.2	3/4	D-3	底面ナデ整形、口唇部スス付着
62	カワラケ		4.8		底部2/3	D-3	
63	カワラケ		(4.8)		底部1/4	D-3	
64	カワラケ		(5.5)		底部1/4	D-3	
65	カワラケ		6.8		底部ほぼ全周	D-3	
66	カワラケ		(5.8)		底部1/3	D-3	
67	カワラケ		(6.2)		底部1/4以下	D-4	
68	カワラケ		5.6		底部全周	D-4	外面スス付着、故意に口縁欠損
69	カワラケ		6.6		底部全周	D-3	
70	カワラケ		(6.3)		底部2/3	D-4	外面黒色処理
71	カワラケ		5.4		底部ほぼ全周	D-4	柱状高台
72	カワラケ	(8.3)			口縁1/4以下	D-4	
73	カワラケ	(8.6)	5.1	2.3	1/3	E-1	
74	カワラケ		(6.0)		底部1/3	E-1	
75	カワラケ		5.2		底部全周	E-1	柱状高台
76	カワラケ		(8.0)		高台一部存	E-2	足高高台、色調浅黄橙色
77	カワラケ	(11.3)	(5.4)	3.2	1/4以下	E-2	焼成良好
78	カワラケ	(11.1)	(7.2)	3.9	1/4以下	E-2	焼成良好
79	カワラケ		(8.2)		底部1/4以下	E-2	外面黒色処理?
80	カワラケ		6.0		底部ほぼ全周	E-2	
81	カワラケ		(8.2)		底部1/4	E-2	
82	カワラケ		(6.3)		底部1/3	E-2	
83	カワラケ		(7.0)		底部1/3	E-2	
84	カワラケ		6.0		底部2/3	E-2	
85	カワラケ	5.2	5.1	2.3	1/2	E-3	口唇部スス付着
86	カワラケ		5.0		底部ほぼ全周	E-3	
87	カワラケ		(7.2)		底部1/4以下	E-3	
88	カワラケ		(6.4)		底部1/4以下	E-3	
89	カワラケ		(5.9)		底部1/4以下	E-3	
90	カワラケ		6.4		底部ほぼ全周	E-3	
91	カワラケ		4.0		底部1/2	E-3	色調にぶい黄橙色
92	カワラケ		(7.2)		底部1/4	E-4	
93	カワラケ		(6.2)		底部1/3	E-2	外面黒色処理?
94	カワラケ				1/4以下	E-3	足高高台
95	カワラケ		(4.6)		1/4以下	E-4	柱状高台
96	カワラケ	(8.4)		1.4	1/4以下	F-3	手づくね、内面ハケメ整形
97	カワラケ	(10.9)	(6.5)	3.2	1/4以下	F-3	
98	カワラケ		(4.5)		底部1/3	E-4	柱状高台、外面黒色処理
99	カワラケ				小破片	E-4	外面線刻?
100	カワラケ		(6.0)		底部1/3	F-3	色調浅黄橙色
101	カワラケ		(6.5)		底部1/4以下	F-3	
102	カワラケ	4.7	5.8	1.8	ほぼ完存	F-3	口唇部スス付着、底部ナデ整形
103	カワラケ	(9.0)	(6.2)	2.0	1/4以下	F-3	口唇部スス付着
104	カワラケ		(4.3)		底部1/3	F-3	色調浅黄橙色
105	カワラケ		6.4		底部全周	F-3	
106	カワラケ		(7.5)		底部1/4	F-3	内面底部指ナデ
107	カワラケ		(4.7)		底部1/3	F-3	
108	カワラケ		(8.6)		底部1/4以下	F-3	

第5表 遺物観察表③

番号	器種	法 量			残存率	出土地点	備考
		口径	底径	器高			
109	カワラケ		(6.3)		底部1/4以下	F-3	
110	カワラケ		(5.7)		底部1/3	F-3	内面線刻、一部ヘラミガキ残る
111	カワラケ		(5.0)		底部1/3		
112	カワラケ		(7.8)		底部1/3		
113	カワラケ		4.3		底部1/2	サブTr 1	
114	カワラケ		(6.2)		底部1/2		内外面スス付着
115	カワラケ		(6.8)		底部1/4以下		
116	カワラケ			1/4以下			足高高台
117	カワラケ		(5.8)		底部1/3		
118	カワラケ		(6.0)		底部1/3	Tr 2	確認調査
119	カワラケ		(6.3)		底部1/3	Tr 1	確認調査
120	カワラケ		(6.2)		底部1/4		
121	カワラケ		5.9		底部ほぼ全周	Tr 1	確認調査
122	カワラケ		5.8		底部ほぼ全周	Tr 4	確認調査
123	カワラケ	(4.8)	(4.8)	1.1	1/3	Tr 2	確認調査、口唇部スス付着
124	カワラケ				口縁小破片		外面横線
125	カワラケ				底部小破片	サブTr 1	内面線刻、色調淡橙色
126	山茶碗		(8.2)		底部1/4以下		内面自然釉
127	皿		(9.7)		底部1/4以下	D-2	瀬戸・美濃、灰釉
128	天目茶碗		4.8		底部全周	D-2	瀬戸・美濃、鉄釉
129	縦縁中里		(3.8)		底部1/3	D-2	瀬戸・美濃、灰釉
130	折縁深里		(12.8)		底部1/4以下	D-2	瀬戸・美濃
131	天目茶碗				小破片	D-4	瀬戸・美濃、鉄釉
132	山茶碗		4.9		底部1/2	E-2	内面自然釉
133	甕				小破片	E-1	常滑、外面押印文
134	捏ね鉢				小破片	E-1	常滑
135	捏ね鉢				底部小破片	E-1	常滑
136	天目茶碗				小破片		瀬戸・美濃、釉貫入
137	天目茶碗				小破片		瀬戸・美濃
138	折縁中里				小破片		瀬戸・美濃、灰釉
139	折縁深里				小破片		瀬戸・美濃、灰釉
140	摺鉢				小破片	Tr 1	確認調査、瀬戸・美濃
141	青磁碗	(15.5)			口縁1/4以下		同安窯、外面櫛描文、内面刻花文
142	青磁碗				小破片	D-3	龍泉窯、鍋連弁文
143	青磁碗				小破片		龍泉窯、鍋連弁文
144	青磁碗				小破片	D-4	同安窯、内面櫛描文
145	碗		3.6		底部1/2		瀬戸・美濃、灰釉
146	仏飯器		4.6		底部ほぼ全周		瀬戸・美濃
147	甕		(6.8)		底部1/3	SB 1	外面タタキ、底部木葉痕
148	台	(4.0)			1/4以下	SB 1	土師器、受け部マツツ
149	坏蓋	(13.6)			口縁1/4以下	E-2	須恵器
150	甕				小破片	D-3	須恵器、外面波状文
151	高坏		(9.4)		底部1/4	SB 1	須恵器
152	高坏				小破片	D-2	須恵器、内面自然釉
153	高坏	(20.3)			口縁1/4以下	F-4	土師器、有段高坏
154	高坏				接合部全周	E-1	土師器、内面ヘラケヅリ
155	高坏				脚部1/4以下	E-2	土師器、赤彩、内面ヘラケヅリ
156	坏		(3.7)		底部1/3	SB 1	土師器、底部木葉痕
157	坏		(4.5)		底部1/4	サブTr 1	土師器、底部木葉痕
158	碗	(12.6)	(4.4)	6.4	1/3	D-3	土師器、底部ヘラケヅリ

第Ⅲ章 第4次発掘調査

1. 調査の経過

浅間大社遺跡は、北は大宮溶岩流と潤井川沖積地との接点から、南は潤井川沖積地内の富士富士宮由比線までの、南面する緩斜面上にある。調査区は、遺跡範囲の北西、潤井川沖積地にあたると考えられる（津屋1968）。浅間大社廻廊西側の境内地内である（第1図）。第4次発掘調査は、遺跡面積約78,977m²のうち、約185m²を調査した。調査前は、竹や桜などの林であった。廻廊と調査区は、幅約4mの未舗装の通路で隔てられている。

調査は、平成14年11月20日に、開発事業者である富士山本宮浅間大社との打ち合わせを経て、平成14年12月16日から平成15年1月31日まで実施した。うち、B区は1月9日で発掘調査を終了している。

調査範囲は、浅間大社祈禱殿（仮本殿）建設地である。搅乱の及ぶ箇所を除き、北側をA区、南側をB区とした。表土除去、及び埋め戻しは、注意を要する箇所は人力、他は重機で行なった。遺物包含層、及び遺構調査は、全て、人力で行なった。

2. 層序

層序は、B区において確認されたものを、基本土層とする（第23・27図）。標高120m付近で、大きく3層に分層した。

I層 黒褐色土 表土。根が著しく張る有機質腐植土。一握り大の円礫を含む。

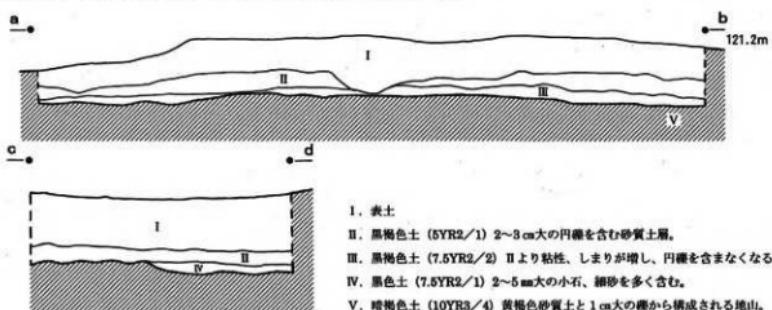
II層 黒褐色土 遺物包含層。2~3cm大の円礫を含む。砂質土。

III層 黒褐色土 遺物包含層。II層に比べて粘性強く、円礫を含まない。砂質土。

IV層 黒色土 遺物包含層。2~5mm大の小石、細砂を多く含む。砂質土。

V層 暗褐色土 地山。黄褐色砂質土と、1cm大の礫からなる。

遺物包含層のうちII・III層は、B区南半に残存、IV層は、B区東隅で確認している。A区では、表土直下に地山を検出し、土坑は地山を掘り込んでいた。



第23図 層序

3. 遺構

a. 集石土坑 (第24~26図)

A区の調査前は、石列で囲んだ植樹があった。それらと表土を除去して、集石と新たな石列を検出した(第24図)。石列は、集石土坑を取囲むような位置関係で、南方を除く3方向に確認している。石列内部の北西の隅には、コンクリートで固められたピットがつくられている。集石土坑及び石列の南北方向の軸は、N-2°-Wである。浅間神社社殿及び廻廊の主軸はN-7°-Wであるので、やや傾きが異なる。

集石土坑は、東西1.95m×南北1.95m、深さ0.4mの地山を掘り込んでいた。正方形の土坑内に、石が層状に積まれていた。集石は、4層に分かれる。1層は整形された凝灰岩、2層は碎石、3層は拳大の礫、4層は一抱え以上もある大石と、くずれた凝灰岩や礫である(第25図)。

1層は、土坑掘り込み面から浮いた状態で検出された。集石土坑の南西部分は、除去されている可能性がある。石材はほとんどが凝灰岩で、一部玄武岩がある。凝灰岩は、角材に加工されているが、玄武岩は未加工である。凝灰岩は、色調が黄色と、灰色の2種類ある。いずれも風化し、もろく崩れやすい(第25図a)。

2層は、5cm大を中心とした扁平な碎石と褐色土で、土坑掘り込み面と3層を覆う層である。非常にくずれやすく、碎石の切り口も新しかった。1層と2層からは、近現代の陶磁器とガラス瓶、用途不明の金属製品が出土した。しまりのない褐色土と共に、石の間に入り込んだ状態であった(第25図a)。

3層は、土坑掘り込み面とほぼ同レベルである。拳大の石が、土坑内に隙間なく水平に並べられていた。3層からは、遺物の出土はなかった(第25図b)。

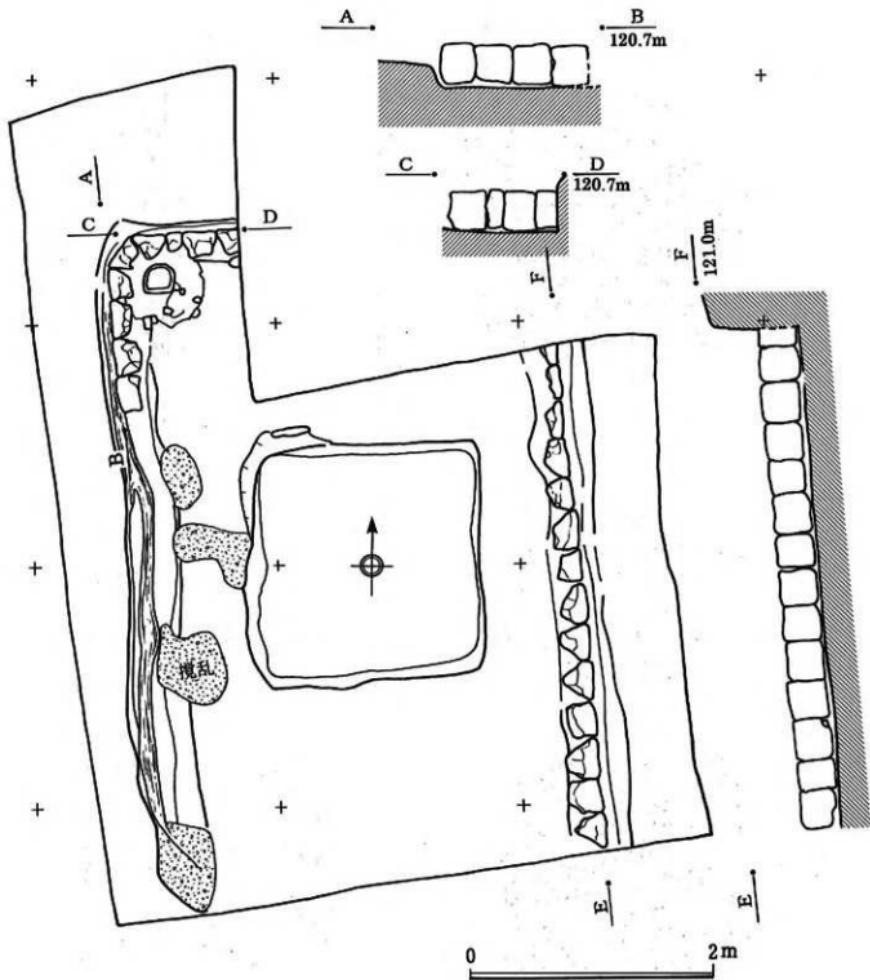
4層は、土坑底面には一抱え以上もある大石が並べられ、その隙間に、くずれた凝灰岩と、礫が詰まっていた。大石以外の石の積み方は乱雑で、石材ごとの規則性もない。4層には、細かな炭化物が混入していたが、その他の遺物の出土はなかった(第25図b、c)。

土坑は、地山を掘り込んでつくられ、壁はほぼ垂直である。西壁は、中央付近に搅乱をうけている。

1層で検出された加工された凝灰岩は、すべて欠損部分があるが、平面形態や断面形態に、ある程度の共通点が認められる。断面が、幅20~24cm×厚さ12~13cmの長方形と、同じ大きさの山形の角材と、一辺が13~15cmの正方形の断面の角柱状の、二つに分かれる。他は、幅13cm×厚さ8cm程の板状、18cm×16cmの角状、つぶれた楕円柱状などがある。断面が長方形のものと、山形のものには、一方の表面上に、一辺が14~15cmの正方形のくぼみがつけられているものが多い。また、断面が山形になるものは、色調が灰色の凝灰岩に限られる。

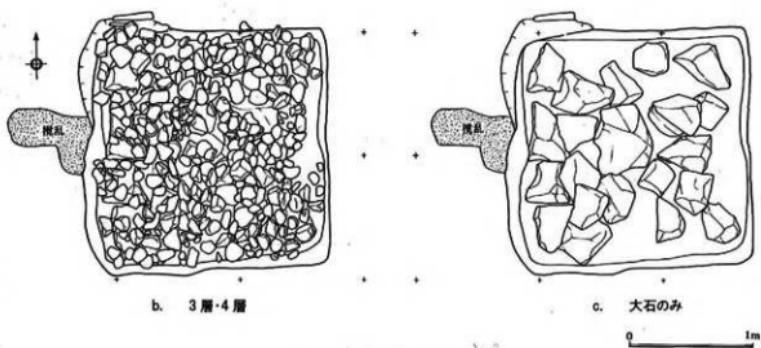
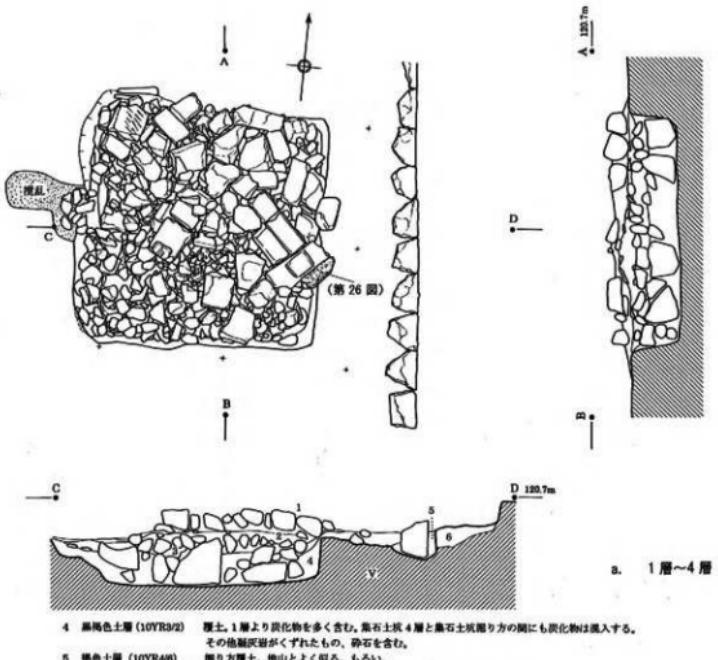
角柱状の石材のうち、数点に、文字が刻まれているものがあり、うち1点を図示した(第26図)。「...~~郡~~沼津下本町 中岡」と読むことができる。沼津は、静岡県東部の中核都市の地名であり、大正12(1923)年から「沼津市」となった。明治22(1889)年の町村制施行後、大正12(1923)年までは、駿東郡沼津町であった(若林ほか1978)。

集石土坑の年代は不明である。第26図の角柱材は、再利用された可能性があり、集石土坑の年代を求ることはできない。集石土坑1・2層と、3・4層との遺物の出土状況の違いからすると、両者の間には、作り変え等による時間差がある可能性がある。しかし、集石土坑4層にも集石土坑1層と同じ凝灰岩が含まれることからすると、その時期差も短い可能性がある。



第24図 A区全体図

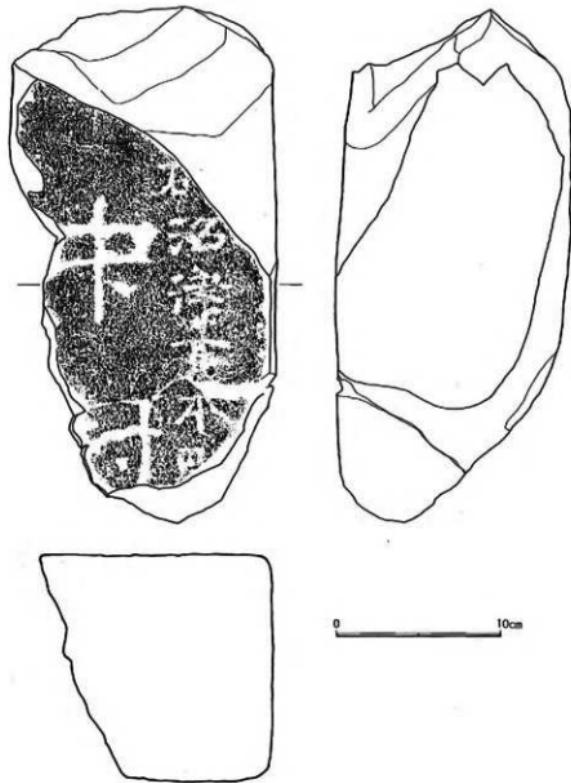
（参考文献）参考文献



第25図 集石土坑全体図

集石土坑の用途は、不明である。寛文10年（1670）に描かれたとされる絵図（官幣大社浅間神社1929）からすると、第4次発掘調査区は「日供所（ひのこくしょ）」跡に相当するが、今回の調査では、江戸時代前期に遡る資料は得ていない。

石列は、集石土坑構築面と同じであるので、集石土坑に関連すると考えられる。



第26図 集石土坑1層角柱材（凝灰岩）

b. 挖立柱建物 (第27・28図、第6表)

掘立柱建物 (SB 2) は、B 区南端、B-2・B-3・C-2・C-3 グリッドに跨って検出された。遺構確認面は、地山 (V 層) である。柱穴は P 1～P 4 の 4 本を確認している。調査区外に広がる可能性もあるが、ここでは、4 本柱として捉える。ピット間の距離は、P 1～P 3 間 P 1～P 2 間 2.1m、P 3～P 4 間 2.25m、ピットの平面形態は方形を主とする。

周辺には、その他、ピットが 2 基確認されたが、関連すると考えられる遺構はない。

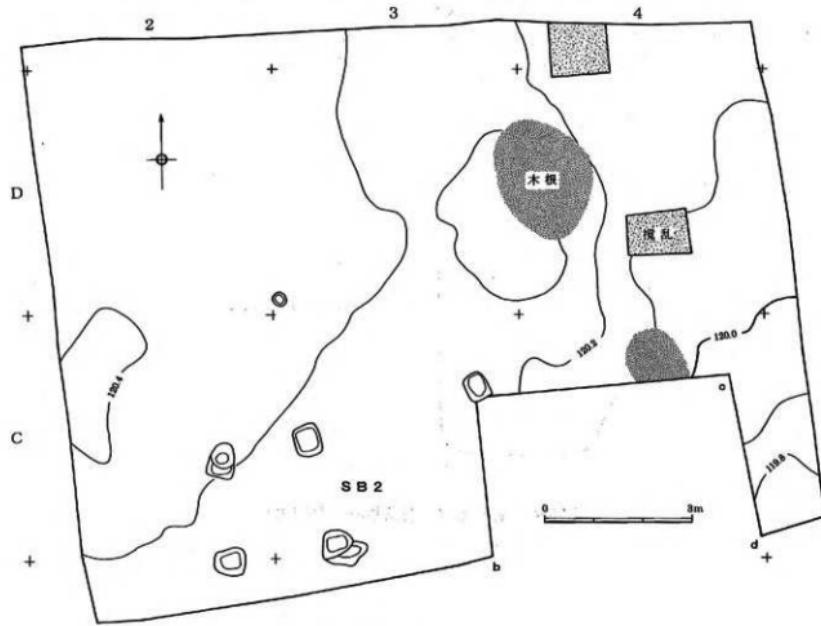
南北方向の軸は、N-9°-W である。現在の浅間大社社殿及び廻廊は、主軸は N-7°-W であるので、SB 2 は、やや西に傾く方向にある。標高は、120.3m 付近である。

P 1～P 4 のいずれのピット覆土 1 層中から、カワラケを出土している。また、SB 2 周辺の遺物包含層からも、多くのカワラケを採取している (第29図)。
(佐野)

第6表 B区ピット計測表

(単位: cm)

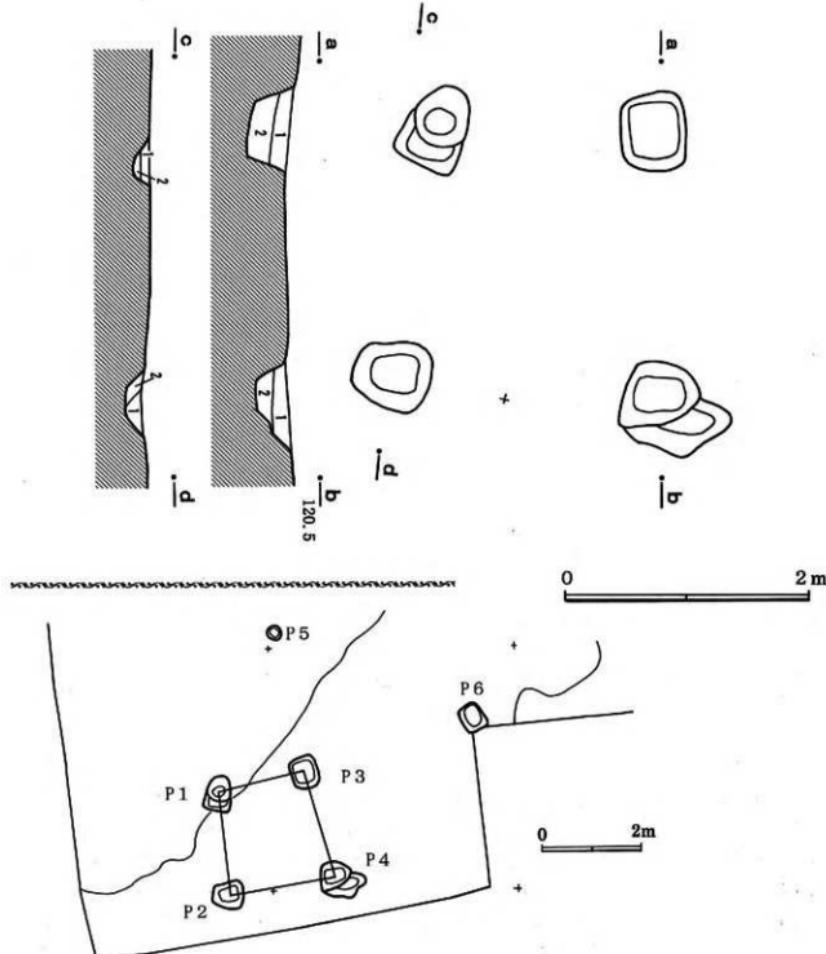
ピット名	位置	長軸(下端)	短軸(下端)	深さ	備考
P 1	C-2	73 (23)	50 (26)	19.9	SB 2
P 2	C-2・B-2	62 (37)	53 (32)	23.4	SB 2
P 3	C-3	63 (46)	53 (41)	37.8	SB 2
P 4	C-3・B-2	92 (41)	84 (28)	26.8	SB 2
P 5	D-2・3	28 (18)	25 (16)	18.8	
P 6	C-3	56 (42)	44 (32)	30.6	



第27図 B区全体図

1. 黒色土層 しまりがあり黒色スコリアが目立つ層で、カワラケ片を多く含む。

2. 黒色土層 黒色スコリアが目立つ層で、粒子が粗い。



第28図 SB 2 平面図

4. 遺 物

a. 遺物出土状況

南区においても前述の北区同様に層位的に遺物の出土が把握される状況である。南区では、客土および耕作土からなる厚い表土と地山との間に30cm程度の層厚を持つ遺物の包含層が認められている。それは、北区（第3次発掘調査）で確認されている第6層に相当する平安時代から室町時代（12世紀～15世紀）の遺物を包含する第II層および第III層であり、この南区までカワラケを主体とする遺物の包含層の広がる様子が知られる。

浅間大社の位置するこの周辺の地形は、丘陵裾から徐々に傾斜して神田川流域の低湿地帯に至るものである。特に、南区においては、その傾斜が明瞭に観察されており、浅間大社の馬場側に向かって地形が落ち込む様子が確認されている。この傾斜地に対して分布する第6層の遺物包含層であるが、ふたつの調査地点の成果からそれが浅間大社の西側の広い範囲に分布することが判明しているわけである。因みに、両地点におけるこの層の比高差は1m程度を測る。

また、調査地区的南東隅においてこの12世紀～15世紀の遺物包含層下において第3次調査で確認されている第13層に相当する9世紀～10世紀の遺物を包含する第IV層が検出されている。この遺物包含層が検出されている箇所（C-4グリッド）は、ここから馬場にかけて本来低湿地に移行する微高地の末端部分に当たり、遺物包含層の層厚が比較的厚くなる部分にあたる。この第IV層が周辺へどのような展開をするかよく分からぬが、馬場の南側での第1次および第2次の発掘調査では検出されていないので、微高地上で散在するような状況で比較的限られた範囲に分布する様子だけは指摘できる。

この南区においては、北区で認められる第2層に相当するものは確認されていない。地形が比較的安定していない箇所であるとともに神社改修などの造成による土地の変更が頻繁に行なわれたため残存しないであろう。

遺構に関連する遺物としては、掘立柱建物跡であるSB 2の柱穴から出土している青磁碗の破片とカワラケをあげることができる（第29図159～168）。柱穴の覆土からは一応にカワラケ片の出土が認められる第2層としたものが検出されている。これらは、本来の柱穴の深さを想定すると穴の比較的深い部分にある層と考えることができる。そこから出土するカワラケ片やその覆土の状況からカワラケを埋納した痕とは思われないが、比較的その覆土自体はしまっており、掘立柱建物の建築時にカワラケ混入土を柱穴の掘り方として利用している可能性を指摘することができる。

今回実測図として掲載しているカワラケは、いずれも南西側の柱穴P 2からの出土であり、図上で復元できるものが多い。これらは、二次的な投棄や移動がなされていないよう、残存状況の良いもので占められているおり、他の遺物包含層出土のものとは状況を若干違えている。

b. 出土遺物（第29・30図）

第4次発掘調査（南区）では、SB 2のP 2出土のカワラケ類が一括出土の資料と捉えることができる。これらのカワラケは全て破片資料であるが、底径に対する口径の比率が大きく、器高の高い160、165と底径に対するそれが小さく、器高の低い161～163、コースター状の体部でほとんど整形しない168とに大きく分けて捉えることができる。160は口径：底径が2.1：1、165は2.2：1の値を示し、ほぼ底径：口径=1：2の大きさを示している。これに対して161は底径：口径が1：1.4、162と163が1：1.3の比率を示す。このように168の例を含め、大きく3つの型式のある

ことが分かる。160、165などは10世紀後半以来の古い型式を残すものであるが、外反気味に広がる体部を持つ160は新しい型式要素を認めることができる。161～163の皿状のものは、11世紀中葉より普遍化する型式であり、中世以降も継続して採用されているものである。これらのカワラケの内、161、162、163、164、167には、その内外面にススの付着が顕著に認められ、灯明皿として使用されたものと考えることができる。

このSB 2出土のカワラケは、その型式から12世紀前半段階のものであると想定している。ただし、この段階の遺跡出土資料は、まだ富士地域においてほとんど見られない段階のものであり、その実態はよく分からない。

グリッド出土遺物としては、内彎しながら体部が広がり、口縁に較べてやや径の大きくなるカワラケ169が調査区西側B-2・C-2グリッドで出土している。これもSB 2出土カワラケ同様に12世紀前半代の年代が想定される。これが出土しているグリッド内にSB 2が位置している点もその相関性を表わしているのかもしれない。

174、180、187が皿状のカワラケである。短く内彎気味に外傾する口縁を持つ180、187と直立気味に立ち上がる口縁を持つ174とに分けられるが、174は他のものより後出の要素が大きいようである。180、187が14世紀代、174が15世紀のものであろうか。なお、187は、他のカワラケより粒子が粗い胎土で、雲母や石英の混入が目立つやや特異なものである。

これらのカワラケ以外では、183の足高台付坏と188の柱状高台付坏のカワラケが注目される。183が11～12世紀、188が12世紀前半代（坂本1986）の年代が想定される。

194～196は青磁碗の破片資料である。194には口唇部内面に横線文が見られ、195は外面に鏽蓮弁文、196には内面見込み部に劃花文の一部と見られる縦線が認められる。いずれも龍泉窯の製品であろう。194が12世紀後半～13世紀初頭、195が13世紀中葉～14世紀前半、196が12世紀後半～13世紀初頭のそれぞれ生産年代が当てられる。

197は体部下位に斜方向のヘラケヅリが見られる駿東坏である。底部は回転糸きりの後外周手持ちヘラケヅリを行なっている。斜方向のヘラケヅリは甲斐型坏から借用した技法であるが、このような型式は、9世紀の後半以降出現し、10世紀の前半には消失するものである。198は、口縁部内面の凸帯が未発達な駿東壺の口縁部破片である。5世紀後半～6世紀前半のものと思われる。199は須恵器壺の肩部破片と思われるもので、横方向カキメと縦位の沈線を見ることができる。

（渡井）

〈文献〉

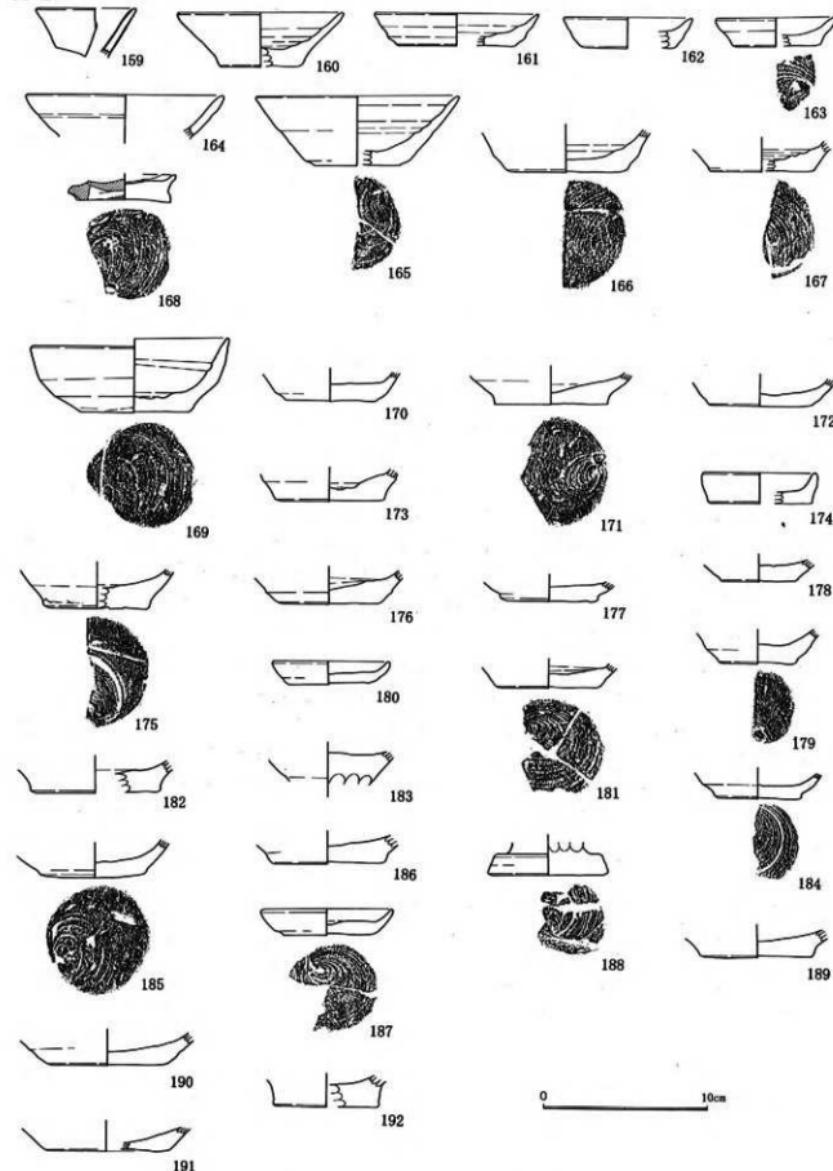
官幣大社浅間神社社務所 1929『富士の研究Ⅱ 浅間神社の歴史』古今書院

坂本 美夫 1986「柱状高台の皿・坏について」『シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題』神奈川考古
第21号 神奈川考古同人会

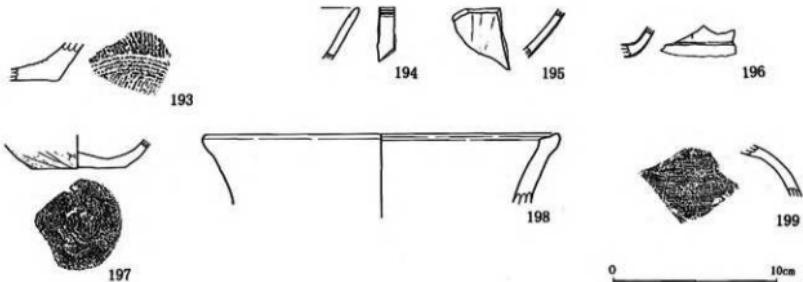
津屋 弘遠 1968『富士火山地質図 1:50,000』地質調査所

若林淳之ほか 1978『角川日本地名大辞典』22 静岡県

SB 2



第29図 SB 2・包含層出土遺物⑤



第30図 包含層出土遺物⑥

第7表 遺物観察表④

番号	器種	法量			残存率	出土地点	備考
		法量	底径	器高			
159	青磁碗				小破片	SB 2	P 1 出土
160	カワラケ	(10.2)	(4.8)	3.3	1/4以下	SB 2	P 2 出土
161	カワラケ	(10.0)	(7.0)	2.0	1/4以下	SB 2	P 2 出土、内外面スス付着
162	カワラケ	(7.7)	(5.6)	1.9	1/4以下	SB 2	P 2 出土、内外面スス付着
163	カワラケ	(7.2)	(5.4)	1.8	1/4以下	SB 2	P 2 出土、内外面スス付着
164	カワラケ	(12.1)			口縁1/4以下	SB 2	P 2 出土、内外面スス付着
165	カワラケ	(12.4)	(5.4)	4.2	1/4以下	SB 2	P 2 出土
166	カワラケ		7.4		底部2/3	SB 2	P 2 出土
167	カワラケ		(6.4)		底部1/3	SB 2	P 2 出土、内外面スス付着
168	カワラケ		5.8	1.7	2/3	SB 2	P 2 出土
169	カワラケ	12.2	6.8	4.5	ほぼ完存	B-2・C-2	
170	カワラケ		5.5		底部ほぼ完存	B-2・C-2	
171	カワラケ		7.0		底部1/2	B-2・C-2	
172	カワラケ		6.3		底部全周	C-2	
173	カワラケ		(6.6)		底部1/3	B-2・C-2	
174	カワラケ	(6.7)	(6.4)	1.9	1/4以下	C-2	
175	カワラケ		6.4		1/2	B-3・C-3	
176	カワラケ		(6.2)		底部1/3	B-3・C-3	
177	カワラケ		(5.8)		底部1/4以下	B-3・C-3	
178	カワラケ		(4.6)		底部1/3		
179	カワラケ		4.6		底部1/2		
180	カワラケ	(7.0)	5.2	1.5	2/3	C-3	
181	カワラケ		6.4		底部2/3	C-3	
182	カワラケ		(7.8)		底部1/4以下	D-2	
183	カワラケ				接合部全周	D-2	足高高台
184	カワラケ		5.3		底部1/2	D-4	
185	カワラケ		6.2		底部全周		
186	カワラケ		(7.0)		底部1/2	C-3	
187	カワラケ	(7.9)	5.6	1.6	1/2	Tr 1	確認調査
188	カワラケ		(7.3)		底部1/4以下	Tr 2	柱状高台、確認調査
189	カワラケ		6.4		底部2/3	Tr 3	確認調査
190	カワラケ		(7.4)		底部1/3	Tr 3	確認調査
191	カワラケ		(7.4)		底部1/3	Tr 3	確認調査
192	カワラケ		(6.4)		底部1/4以下	Tr 1	確認調査
193	摺鉢				小破片	D-2	
194	青磁碗				小破片	B-3・C-3	
195	青磁碗				小破片	Tr 1	確認調査
196	青磁碗				小破片	Tr 1	確認調査
197	壺		5.8		底部2/3	C-4	駿東壺
198	甕	(21.3)			口縁1/4以下	D-4	駿東甕
199	甕				小破片	C-3・D-3	須恵器

第IV章 まとめ

1. 遺跡の動向

浅間大社遺跡に対する発掘調査は、狭い範囲ながら4回実施されているわけであるが、それぞれ直接神社の歴史にかかわる土器類などが発見され大きな成果を上げている。

第1次および第2次の発掘調査では、江戸時代の陶磁器類を多く含む大きな濠が発見され、神社が大きな溝により区画されているかつての様子を窺うことができた。この濠は、12世紀前半代に掘削されたものと考えられるが、数度の改修を経て、江戸時代の終わりから明治時代にかけての廃仏毀釈や安政の大地震など影響を受けて埋没しているものである。歴史の画期にとともに失われてしまった遺構であると言える（富士宮市教育委員会1996）。

この濠が經營された年代は12世紀から19世紀にかけてであるが、出土遺物の主体となる年代は17世紀以降である。それに対して、今回報告されている第3次と第4次の発掘調査では、12世紀から15世紀までの資料で占められており、いままであまり見ることができなかつた時代の遺物を確認することができた。特に、平安時代の終わり頃の土器類が第3次発掘調査地点（北区）で多く発見されたことは、ほとんど遺構、遺物の存在が確認できなかつた平安時代の中で、この富士宮の地に対して新たな進出が始まる段階の資料として極めて重要であると言えるものである。それは、出土遺物から検討される大宮城（富士宮市教育委員会2000）の開始段階ともほぼ一致しており、湧玉池から神田川にかけての区域に対する計画的な開発の跡であると指摘できるが、この段階に館としての大宮城と神社域としての浅間大社遺跡の組み合わせが、すでに形成されていることを指摘できるのである。そして複合する遺跡からなる地域的な拠点としての大宮城周辺の姿を考える中で、河川交通を主とする交通の利便性が大きい地区である他に、一連の施設が富士山信仰に大きくかかわるものであることも指摘できるのである。ただし、それが直接神社の創建年代に関連するものとは言えない。限られた調査区で、神社域の偏った地点を対象としている発掘調査から導かれた成果から判断することはできない。実際、少量の資料であるものの北区における灰釉陶器や南区のB地区における駿東窯など9世紀後半代の土器が発見されているのである。浅間大社（神社）に残されている歴史文書では大同元年（806）に今の地に神社が鎮座したと示されており、来る2006年には鎮座1200年を迎えるのである。この年代つまり9世紀前半代の状況についての考古資料を通じた検討は今後の課題であるが、それが富士宮の歴史の根底にかかわるだけに、周辺の遺跡に分布の状況も踏まえながら解明していくかなければならない大きなテーマでもある。

近年の発掘調査によって、村山浅間神社遺跡（富士宮市教育委員会2002）や泉遺跡（富士宮市教育委員会1993）などで平安時代の資料が発見され、かつて富士宮にこの時期の遺跡は存在しないのではないかと考えられていた状況を一変している。そして、それは一般集落としての泉遺跡、拠点的な政治、宗教的な色彩を帯びる浅間大社遺跡、山岳信仰に関連する高所で局地的な村山浅間神社遺跡など性格の違いあるいは機能の違いとして認識できる遺跡分布を指摘することができる状況にある。さらにその状況は、泉遺跡から浅間大社遺跡にかけての今の市街地に展開する生活域と富士山中にある村山浅間神社遺跡とした信仰の場とも分けることができるわけである。

その詳細はまだよく分からぬが、初現的な富士山信仰に係る段階だけに重要な時代であり、遺跡の分布である。特に、現在市街地となっているため、遺跡の実態がよく分からなくなっている泉遺跡、貴船町遺跡、浅間大社遺跡、大宮城跡などの多くの時代が複合する有力な遺跡は、相互の関連を考えながら、今後注目していかなければならない遺跡群であると思われる。

今回の調査では、両方の地点で発見されている遺構とともに12世紀～15世紀にかけての遺物包含層の発見も大きな成果であったと思われる。この段階は、浅間大社遺跡第1・2次発掘調査や大宮城跡の調査などで遺構、遺物が発見されているが、それは、あくまでも両遺跡だけのことであることは、周辺での発見例はまだない。今後に期する部分が多い。この浅間大社遺跡や大宮城跡が際立つ状況であることは、かつての両遺跡の調査報告書でも指摘されたことであるが、今回の調査はさらにその内容を充実させることとなったのである。調査した地点は、神社域の周辺部に当たるが、そのような場所において、12世紀前半には竪穴（SB 1）や掘立柱建物（SB 2）など各種施設が建築されている様子がよく分かる。それに伴い検出されている遺物包含層は、12世紀～15世紀の遺物を包含するものであるが、その大半がカワラケ片である点を大きな特徴としている。カワラケは多くの型式が認められ、時間幅が窺えるものとなっているが、明らかに時間的に継続するものとは言えない。このような多形式に亘る割には、一様にカワラケの多くは表面の摩滅が進んだものであり、一定の期間放置されたか、別地点から流入したような状況を示している。この遺物包含層を標準的な堆積で捉えるには、あまりにもカワラケの量が多すぎるようであり、時代差のあるものが混在し過ぎている。そのことから、カワラケの包含層として二次的に埋設させられたような状況を想定することができる。そのため、数回の廃棄行為によりカワラケ自体の表面摩滅の進行や遺物包含層の神社西側に広がる様子、あるいは第1・2次発掘調査地点で見られないことなどが説明されるのであろう。

このように、神社の西側に広がる遺物包含層が人為的な造成痕でないかと考え、その造成時期を包含層内の最も新しい遺物類の時期ではないかと想定している。ただし、富士地区におけるカワラケの研究は、近年、その重要性が指摘されようになり資料の蓄積も進み出しているが、研究に端緒が付けられたばかりである。その型式変化など編年的な研究はほとんど行なわれておらず、時間的な位置付けは、なかなかできない。今回は、天目茶碗などの陶磁器の型式（瀬戸市埋蔵文化財センター-1997）からその時期を検討しているが、いずれはカワラケ類など在地系の土器類で編年ができるよう資料化を図らなければならないものであると考えている。

遺物包含層の中で発見されている手づくねカワラケ（第18図42、43・第20図96）や天目茶碗などの瀬戸・美濃産の陶磁器（第22図127～140）からこの遺物を多く包含する土砂による神社域の造成時期を15世紀前半ではないかと考えている。ちょうど、それは浅間大社遺跡第1次発掘調査発見の濠や大宮城の出土遺物の中で、瀬戸美濃産の陶磁器がその数量が増え、カワラケや陶磁器類の構成比に大きな変化が認められる段階に相当する。今回確認されている遺物包含層の遺物構成の中で瀬戸美濃産の陶磁器の出土がほとんど認められない要因はここにあるわけであるが、それはこの土層の時代観に大きな誤りがないことを傍証しているともいえる。

15世紀前半における浅間大社遺跡や大宮城における画期は、発掘による調査ではまだよく分かつておらず、具体的な遺構としての検出例はない。しかし、文献としては、この段階より浅間大社（神社）に対する改修に関する文書の発せられる例の増えていることが指摘されており（若林1971）、応永25年（1418）に幕府管領細川満之が、將軍足利義持の命を受けて富士大宮司に対して発せられた次のような御教書などからもその様子を窺うことができる。

足利
室町將軍家御教書
義持

富士浅間宮領駿河國富士上方以下所々、段銭・棟別・借錢等課役事、可免許之旨、被仰守護人畢。
早任先規為當社造替金物要脚、可致其沙汰。次神領内諸給主等勤對押社役云々、頗招其咎者歟。
守先例致催促、可全神用之由所被仰下也。仍執達如件。

応永廿五年八月廿七日

(押印) 沙弥(花押)

富士大宮司殿

とある著名な富士浅間宮（浅間大社）に対する文書がある。

これは、南北朝の動乱を機に社会的な地位が向上した浅間宮が、今川氏や幕府の庇護のもと大幅な改修が可能になったことを表すものである。それは当時の政治情勢の中で勢力を増した浅間神社の姿を反映するものであるが、神社自体の造替（改修）が進んだことも表しているわけである。このことが直接今回発見された遺物類と整合するものとは言い切れないが、非常に注目される歴史事象であると言える。

寛文10年（1670）に描かれた絵図に見ることができない集石土坑は、それ以降に築かれたものであろう。そして、大きく破壊されたような状況からみて、ある時点でその機能を失ったものと考えることができるものである。それが廢仏毀釈によるかどうかは分からぬが、近年、それが存在していた記憶は途絶えているようである。

2. おわりに

1994年に始まる浅間大社遺跡に対する発掘調査は、今回で4回目を迎えるわけであるが、それにより浅間大社（富士浅間宮）の歴史に直接係るものが多く発見されている。考古学的な調査研究が、この神社の歴史を解明するのに有効であることを明確に証明しており、今後の周辺地域を含めて更なる調査に期待されるところが大きい。

発掘調査にあたり、富士山本宮浅間大社には現地の調査から本書刊行まで多大な協力をしていただきいた。文末ながら記して感謝申し上げる次第である。

(渡井)

〈文献〉

瀬戸市埋蔵文化財センター 1997『研究紀要』第5輯

富士宮市教育委員会 1993『富士宮市の遺跡』

富士宮市教育委員会 1996『浅間大社遺跡』

富士宮市教育委員会 2000『元富士大宮司館跡』

富士宮市教育委員会 2002『村山浅間神社遺跡』

若林 浩之 1971『第六章 激動する二世紀 一南北朝の動乱から戦国へー』『富士宮市史』上巻 富士宮市

報告書抄録

ふりがな	せんげんたいしゃいせき2							
書名	浅間大社遺跡II							
副書名								
卷次								
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第31集							
編著者名	渡井英誉、武田英俊、佐野恵里、小野田晶							
編集機関	富士宮市教育委員会							
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150 TEL0544-22-1111							
発行年月日	西暦2003年3月20日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
せんげんたいしゃ 浅間大社 いせき 遺跡	富士宮市 宮町	市番号 22207	市番号 76	35° 13' 27"	138° 36' 45"	第3次 20021002 ↓ 20021129	330	消防団第 3分団詰 所建設事 業のため
			県番号 1402			第4次 20021216 ↓ 20030131	185	浅間大社 祈 ^ミ 殿 ^{ミヤ} (仮本殿) 建設のた め
		社寺 集落	30	35° 13' 25"	138° 36' 44"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
浅間大社遺跡		古墳時代						
		平安時代 ～中世	堅穴遺構 1棟 掘立柱建物 1棟 土坑 9基	陶磁器 カワラケ 錢貨	平安時代から中世の 富士浅間宮にかかる 遺構・遺物の発見			
		近現代	溝状遺構 1条 集石土坑 1基					

富士宮市文化財調査報告書第31集

浅間大社遺跡 II

平成15年3月20日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150

(0544) 22-1111㈹

印刷 みどり美術印刷株式会社

〒410-0058

沼津市沼北町2丁目16番19号

(055) 921-1839

写 真 図 版



a. 遺跡遠景（東より）



b. 調査区（第4次発掘調査）近景（南より）

図版2 第3次発掘調査



a. 調査区全景（東より）



b. 調査区全景（西より）

第3次発掘調査遺構①

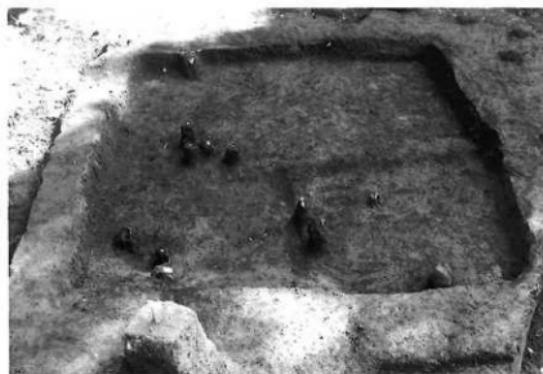
図版3



a. SB1（南より）



b. SB1 挖り方（南東より）



c. SB1 遺物出土状況
(北より)

図版4 第3次発掘調査遺構②



a. SD1(東より)



b. SD1遺物出土状況(南より)



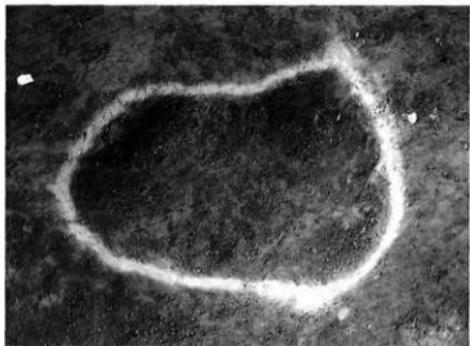
c. SK2遺物出土状況(西より)



d. SK2完掘(西より)

第3次発掘調査遺構③

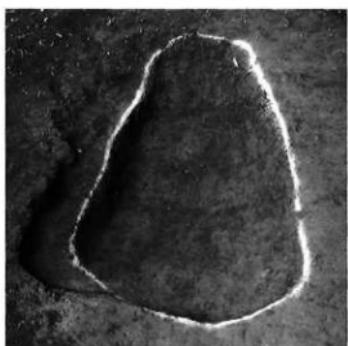
図版5



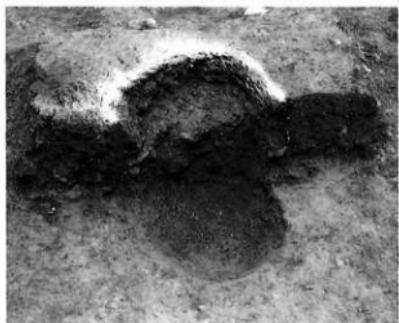
a. SK4完掘（南より）



b. SK5完掘（南より）



c. SK6完掘（南より）



d. SK7完掘（北東より）

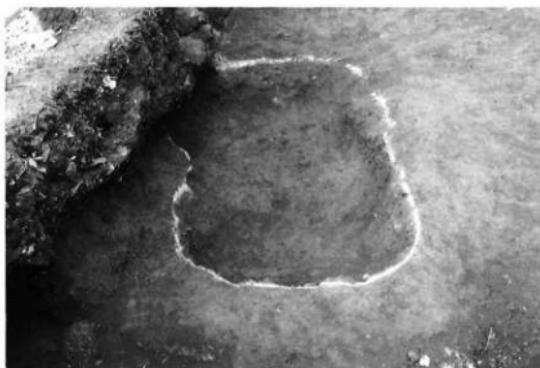


e. SK8完掘（東より）

図版6 第3次発掘調査遺構④



a. SK8遺物出土状況



b. SK9完掘（南より）



c. 遺物集中区①（東より）

第4次発掘調査遺構①

図版7



a. 調査区全景（南西より）

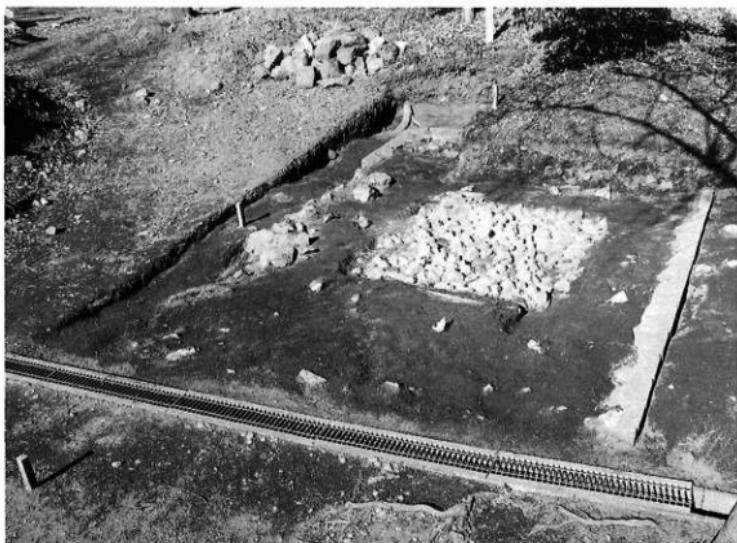


b. 集石土坑 1層（西より）

図版8 第4次発掘調査遺構②



a. 集石土坑 2層（南東より）



b. 集石土坑 3層（南東より）

第4次発掘調査遺構③

図版9



a. 集石土坑 4層（南東より）



b. B区 SB2（南西より）

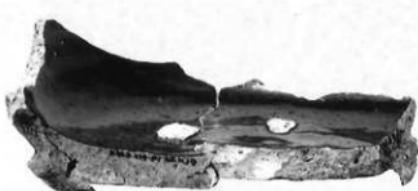
図版10 第3次発掘調査 SB1・SD1・SK5・遺物集中区①・遺物包含層出土遺物



a. SB1出土遺物



b. SB1出土No. 1



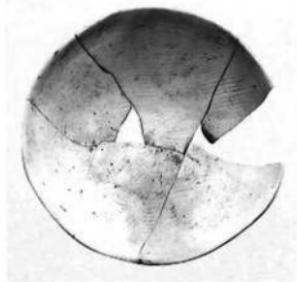
c. SD1出土No.25



d. 出土カワラケNo.68・SK5出土No.34



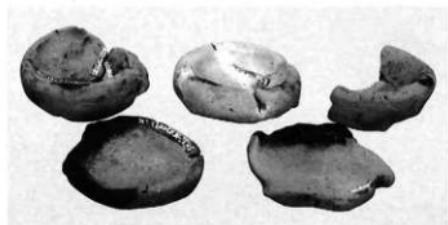
e. 遺物集中区①出土カワラケNo.42・43



f. No.43見込み



g. 出土カワラケ(1)



a. 出土カワラケ(1)



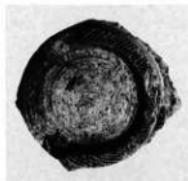
b. 出土カワラケ(2)



c. 出土カワラケNo.110



d. 出土陶磁器No.128



e. No.128高台



f. 出土青磁No.141



g. 出土須恵器No.151

図版12 第3・4次発掘調査遺物



a. SB2出土カワラケ



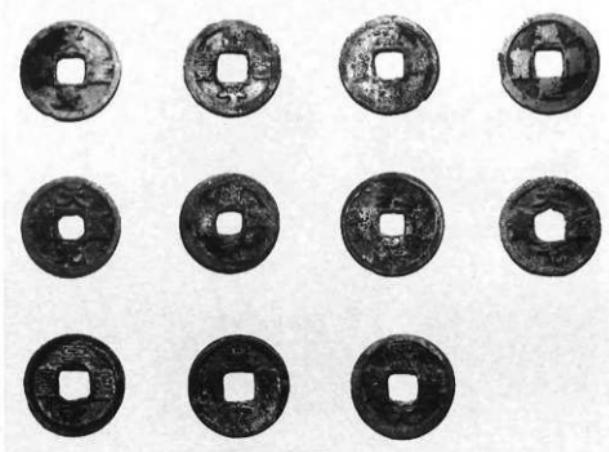
b. 出土カワラケ(1)



c. 出土カワラケNo.169



d. 出土土師器No.197



e. 出土銭貨